

土 淨

昭和十年五月廿日 第三種郵便物認可（毎月一回發行）
 昭和二十三年四月二十八日 運輸省特別郵便認可（毎月一日發行）
 昭和三十三年十月二十五日印刷

第二十四卷

第十期

十一月号



浄土の会員を一人でも多く

◇どなたでも会員になれます。

◇会費は年額四八〇円です。

◇会員には毎月浄土を配布します。

◇この会は皆様の会ですからその発展の為に一人でも多くの会員をつくって、正しい信仰運動をひろめましょう。

お知合の方にぜひおすすめ下さい。

◇お申込は振替（東京八二一八七番）を御利用下さい。

東京都品川区上大崎一の七八二

法然上人鑽仰会

浄土十二月号目次

表紙・扉絵

結城天童

カット

加藤金一

鎌倉の仏教……………佐藤密雄……………(2)

新宗教問答……………耶麻乃菴生……………(14)

高僧伝大島徹水上人の思い出……………吉野翠幹……………(8)

安土の蟋蟀……………鈴木成元……………(18)

砂上の足跡……………村瀬秀雄……………(27)

亡き夫を憶う……………岩田綾子……………(22)

篤信と陰徳が家憲……………広瀬了義……………(6)

雷雨律師こぼれ話…………………………(13)

靈界の不思議……………佐藤諦叙……………(34)

浄土歌壇……………岩野喜久代……………(21)

国際宗教学会…………………………(32)

扉の御法語……………(6) 仏教ものしり帖……………(40)

書評「浄土宗」……………(37) 熊野の猿……………(16)

ノッポの悲哀……………(36) 会員だより……………(41)

法然上人をめぐる人々(三)……………井川定慶……………(38)

浄土

十一月号

かくのごとくして、昨日も
いたづらにくれぬ。今日も又
むなしくあけぬ。今いくたび
かくらし、いくたびかあかさ
んとする。

法然上人御法語



鎌倉の仏教



佐藤密雄

鎌倉時代というのは、日本において政治の実権がはじめて天皇や公卿達から離れて、その当時御所のあった京都を遠く離れて鎌倉に移り、実際の政治は、軍隊と政治力をもつ武士によってにぎられていた時代である。

それより以前すなわち平安時代は、天皇及び公卿達にとつては、最も輝かしい時代であった。かれらは詩歌管弦の幽雅をたのしみ、遊興の日々にあぐくられた。

仏教が、日本に紹介された当初から、それは国家の宗教として受け容れられ、国家の安寧と繁栄を祈るためのものとさ

れて来た。そのため平安時代には、多くの貴族達は、自分自身の安全と繁栄を祈るために大きな寺を建立し、更に当時、かれ達の間に広くその存在を信じられていた悪霊を退治するために、しばしば呪文や祈り（加持祈禱）を僧侶に行わしめたのである。それ故仏教は、皇族や貴族達のための宗教として存在し、かれ達の間から多くの僧侶がでたのである。従って、貴族出身の僧侶達が、貴族達の建立した寺で、自分達のために祈りを捧げたということは少しも不思議ではないであろう。

このような傾向の反動として、鎌倉時代の仏教は、武士と庶民のものとして存在したのである。既成宗教の僧侶達の中にも、この当時、庶民のために、社会事業を行い、救済の手

をさしのべた人々もあつたが、一般的にみて鎌倉時代の仏教の特長は、この時代に新しく興された諸宗派、すなわち、浄土門、禪宗、日蓮宗等によって代表されている。

二

浄土宗は、この時代に興つたおおくの宗派のうち一番早く成立し、他の浄土教の母とも呼ばれ、その教義は鎌倉仏教の特質をはっきりと顯している。浄土宗は法然上人（一一三三—一二二二）により一一七五年、すなわち鎌倉時代より十年前に開かれたのである。この宗の教義は非常に平易かつ簡明である。人々は死後、この世を去ること西の方、遙か遠くに存在する阿弥陀仏の浄土に生れんと欲する。たとえ仏教徒の最終目的が、仏陀自らの悟りの状態を得ることにあつても、一般の人々にとっては、この世の中で何度か生れ変わつて、悟りを得んとしても、それはほとんど不可能である。しかし、阿弥陀仏の浄土においてはそのような悟りの状態を得ることは非常に容易である。それ故、我らは浄土に生れんとする願いをおこし、南無阿弥陀仏と唱えれば、必ず浄土に生れることができる。

阿弥陀仏が浄土を建立した理由は、阿弥陀仏が、すべての人類がこの浄土に生れることが許されるように望みかつ願ひ、そして仏の修行が完成されるのである。それ故我々は、

この阿弥陀仏の願いと一致して、浄土に生れんことを願うのである。

浄土教の宗派とはさきに述べた浄土宗、法然の弟子の親鸞によつてはじめられた浄土真宗、一遍によつて開かれた時宗、及び浄土宗の五派をいうのである。これらの宗派の間には多少の教義の差はあるとはいへ、南無阿弥陀仏と唱えることによつてのみ人々は浄土に生れることができると教えるのである。

日蓮宗は、平安時代における代表的な仏教の一派である天台宗を基として、日蓮によつて創立された宗旨である。天台宗では、法華経の中に示された仏教々理の像を念ずることによつて、人は仏の悟りが得られると教える。これに対し、日蓮は単に南無妙法蓮華経と唱えるだけで、人が仏性または悟りの状態を得られると強調した。

法然上人の場合、上人は西方浄土に在ます阿弥陀仏の救済の力によつてすぐわれると説いたが、日蓮はこれと反対に、救済の力は法華経に見出されると信じた。その故に、かれの教えは経を信ずることを基としている。このような大きな教義上の差違にもかかわらず、かれらの修行の方法は同じであり、それ故日蓮はその様な修行方法を、法然からまなんだとも考えられる。

とまれ、淨土教と日蓮宗とは、全く庶民のための宗教であった。これらの宗教は急速に田舎の農夫達にまで拡がっていった。これに対し、禪宗は武士の間にその勢いをひろめていったのである。淨土宗も日蓮宗も、日本人によって開創されたものであるが、禪宗は支那から移入されたものである。

一一九一年、栄西は支那から臨済禪を伝え、弟子道元は曹洞宗を紹介したのである。禪宗では坐禪が行われるのであるが、これは元來、印度仏教に於ける禪定の方法であつたものが、支那において独特なかたちをとり、わが国に伝えられたものである。禪宗の人々は、冥想し、心を集中し、論理的には不可能と思われる問題をも解決する。このような問題を解決する過程において、かれらは人間の心の眞の姿を理解し、この行をおこなうことによって、この仮の世の生活の中に、永遠の生活を見出し得る理念を確信するのである。

この禪宗は、鎌倉時代において武士により支持され、発展したのであるが、當時の武士の頭目北条時頼は、支那から道隆を招いて、鎌倉に建長寺を建て、時宗は同じく祖元を招いて円覺寺を建立した。そのほか多くの禪宗の僧侶が支那から來朝し、禪宗は徐々に民衆に受け入れられて繁榮したのであ

る。また栄西は、同時に喫茶の風習を伝えて來た。この芸術は簡素で厳格な禪僧達の生活によく調和し、簡素な美を主体とする茶道となり、これを通じて禪は、更に武士や庶民の間に伝播した。

四

平安時代における代表的な仏教は、天台宗と真言宗であつた。これらの二宗によると、實際に存在する世界は唯一つであつて、凡夫は此の世は苦と死の世界であるとする。しかし反対に、聖者はこの世は不死と栄光の世界であるとする。人間が生れたいと望んでいる樂土は、人が住む眞実の土であつて、そこにおける仏教の修行は、仏の住する他の土に行くためではなく、その土に於て、人間から仏になるためのものである。その故に止觀の修行は仏の立場を経験するためのものであるが、しかしこの修行は非常に難しくこの世にいくたび生れかわつて、その経験を得ようとしても出来難いものである。この点において、修行の難解さが、とりもなおさず教義の深遠さ、優秀さを示すものであると言っている。

しかしながら、鎌倉仏教においては、修行の難しさは全く無視されて、老人でも、病人でも、子供でも行い得る容易な修行法が強調され、それ故、法然や日蓮は、仏の名や経の名をくり返すといった易しい修行方法を打ち立てたのである。

鎌倉以前の仏教では、宗教的な幸福を得られるものは、僧侶のみに限られており、所謂、僧侶のための仏教であった。庶民達は、僧侶に供えものをしたり、寺を造立するために寄付したりしたが、これは、人は善い行為によって幸福を得ることができるといふ、当時一般的な思想によるものであり、これらは唯、現世利益のみを期待していたのである。

仏教は、この世の中においてのみ幸福を得ることを目的とする宗教ではなく、この世に続く永遠の世界を求める宗教であり、宗教的幸福を求めるものである。平安時代の仏教に従えば、そのような宗教的幸福を得られる者は、仏教的な修行をした僧侶のみに限られていたわけであるが、これに対し、鎌倉時代の仏教は、すべての人々に開放された修行の方法を教えている法を信ずるものは、庶民、僧侶の別を問わず、真の仏教徒となり得るのである。

現在、日本の仏教は十三宗に別れているが、教義的にみれば、大部分が鎌倉時代の仏教、すなわち浄土門、日蓮宗、禪宗の流れを引いたものである。

更に、今日、日本において実際に生きている仏教もまた鎌倉仏教である。

（筆者大正大学教授）

御 法 語

衣食住の三は、念仏の助業也。これすなはち自身安穩にして念仏往生をとげんがためには、何事もみな念仏の助業也。三途へかへるべき事をする身をだにもすてがなければ、かへりみはぐくむぞかし。まして往生程の大事をばげみて、念仏申さん身をばいかにもくはぐくみたすくべし。もし念仏の助業とおもはずして身を貪求するは、三惡道の業となる。極樂往生の念仏申さんがために、自身を貪求するは、往生の助業となるべきなり。萬事かくのごとし。

惠信作の如來を守り本尊に

篤信と陰徳が家憲

——佐渡の名門、今は旅館に変貌しても
床しい心値は使用人にも遺る——

広瀬了義



「浄土」九月号に大島屋社長村山善太郎氏の「おがむ心」の佐渡紀行中に相川の旅館のお内仏を拝観して、本願寺から拝領の阿弥陀仏の名作と豪華な仏壇に驚嘆せられたのみならず使用人までが淑やかなのに感心せられた記事を読んで、私はハタと膝を打って共感しました。恐らくM旅館とは万長ホテルの頭字でしょう。私は同家とは久しい交友があった。

幅野家はこの町きつての由緒ある旧家であった。先代忠次郎氏は私共の恩師高輪順治郎博士が故伏見宮博恭王殿下と共に独逸留学中御懇意になられた関係からそのお子様方の御教育係の推薦方を博士に一任されていた。博士はお弟子の中から篤行謹直の者から選びたいと全国に手配せられたが幅野家の血統、思想、

信仰、財力、徳望と、近郷、近辺の評判などを綜合せられて忠次郎君を推されて博恭王の第二王子華頂宮博忠王の御教育主任を拝命した。少しくおかれて、私も博士の推薦で博恭王の第四王子博英王の御教育主任の恩命に接した。当時伏見宮の御殿は芝三田台町にあったので幅野君とは同じ宮家で賤食を共にしました。

その頃、今上陛下はまだ皇太子であらせられ、お近くの高輪御殿に御住いあらせられ、華頂宮と学習院では御学友のため時々殿下の御伴して高輪御所に伺っていた。殿下が兵学校を卒業せられて遠洋航海にお出かけになるのでその随行員となってエジプトにもお立寄りになるために各寄港地の歴史、地理、風習

扉の御法語

「あるひは嚴寒にこほりをしのぎて世路をわたり、あるひは炎天にあせをのごひて利養をもとめ、あるひは妻子眷属に纏はれて恩愛のきづなまりがたし」

と浮世の苦勞をしみじみ述べられて、「昨日もいたづらにくれぬ。今日も又むなしくあけぬ」の扉の御法語があり、それに続いて有名な御法語の

「それおしたにひらくる榮花は、ゆうべの風にちりやすく。ゆうべにむすぶ命露は、あしたの日にきえやすし。是をしらずしてつねにさかへん事を思ひ、是をさとらずしてつねにあらん事をおもふ。……」

となります。これは登山状の一部です。

登山状はご承知の通り、南部北嶺の猛反対、念仏禁断の嵐が吹きすさんでいる時に、上人が叡山に遣わされた一文です。かなりの長文ですが、文学的表現によって名句の連続となっています。従って扉の御法語として、今後も登山状の一部を引用させて頂くこととなります。こんな話も登山状にあります。

はいうまでもなくロセツタ石に彫まれた神聖文字、民衆文字の解説などに夢中になって夜を徹して研究していた。不幸殿下は夭折せられたのに殉じて同君は宮家なり同僚の切なる勧めもあったが桂冠した。私に故郷の佐渡には是非来遊せよと再三の勧めがあったので、ある夏、佐渡周遊を志して出かけた。幅野家では私の如き一白面書生に対して全くの賓客待遇で長らく同池を視察させて頂いた。そのお宅の建築の宏壮で堂々たる構えは連もどんな地方の名門でも相撲にならぬ飛離れた雄大で然も京都風の典雅で調度品など一粒通り揃いで三度の食事毎に全部食器を変えたものを用いられ、夜具、座蒲団なども特別あつたえの定紋づきのもので、又私の出入ごとに番頭をつけ金山などに案内されると幅野家のお客様だとして、全山の人々が人にも見せぬ所まで限なく案内し、サーヴスしてくれた。このことはどこに行っても同様であった。殊に御両親の篤信は大変なもので朝夕の仏前で家族一門と共に勤行の丁寧さは念入であった。又町の内外の人々に対する陰徳は想像を絶するものがあるとのことで接する人が異口同音に絶讃し

ていた。そして御祖父は死ぬまで私あての四時音信が絶えなかった。度々再遊まで促されていた。ところが祖父も思次郎君も不幸逝去せられてから自然、音信も心ならずも打絶えていたが一昨年、教え子を通して佐渡に渡り相川に一泊した翌朝、不図、あの幅野家はとうなっているかと心に浮んで、或人に訊くと「あの幅野家はお氣毒にも三代の男の戸主が引越いて逝去せられ相続税のために全部お上に納められて、ただお屋敷が遺っただけなので郷党の方々がこの名門の減びるのを惜んで未亡人文子刀目に、せめて旅館としてでも御先祖のおまもりを絶やさないで頂きたいとお勧めしたので刀目も心も進まなかったようだが、遂に思い切って旅館経営に乗り出されまして一言に私は慌しく万長ホテルを訪れて刺を通ずると上品で氣高い姿の未亡人が現われて来られてサア御上り下さい。お懐しう御座います。積りお話も沢山御座います。今宵は是非当館に御一泊をと親切におもてなし頂きましたが出発が刻々と迫って車も待っていないので極めて短時間に淡い再会の歡びを被べただけでお訣れました。(与野高中学校長)

ある時、閻魔の庁に雄俊という極悪人が獄卒に引かれて現われました。雄俊は閻魔に向つてこう高声に叫びました。

「私は悪人ですが五逆罪を犯したことはありません。ろくなことをしませんが、お念仏だけは申したことがあります。もし私が地獄に落ちたとしたら三世の諸仏は妄語の罪をおかすことになりました」

さすが閻魔さまも一言もなく雄俊を極楽に送つたというのです。

さて扉の御法語ですが、この一句にもまた、上人の深刻な悩み、庶民に対して上人の御信心をまともにぶつけて、いかにして庶民が救われてゆくのかの苦心がにじみ出ています。そのため短い一句にもその意気がもり上っています。扉の御法語は、その前後の文を味わなければならぬのでしようが、しかしこの一句だけを何回繰返して拝見しても、この句だけで私どもの心に真向うから迫ってくるものがあります。

やはり登山状に「修せずしていたづらに是非を論ずる」ことを、たとえば嗔の人が他人の声のよしあしを談ずるのと同じことだと教示されています。

大島徹水上人の

思ひ出



足跡は、誠と熱を以てぶつかれば、何一つ恐れることのない教訓を身を以て示されたといえる。

ところが、今でも上人のことをヌートとした田舎坊主であったと評する人がある。こうした印象も全くの間違いとはいえない。実はそこに上人の偉さがあったのだが、上人に接触の少なかった人が外面だけを見て、上人のことを薄汚い田舎の坊さんというのも無理のない点があった。

上人は増上寺法主になられても、家政女学校を辞められなかったので、東京と京都をよく往復された。また鶴沼の慈教庵（本真寺）にも度々ゆかれたので、国鉄浜松町駅から芝

大門に向う大通りで、上人を見かけることが多かった。羊かん色の改良服の下から、うす汚れた白衣がのぞいているというわけであった。当時の上人は、二十六貫、五尺七寸という、角力とりに法衣を着せたような形であった。

相馬黒光女史の日記滴水録にこんな一節がある。

「御前にお目にかかった第一印象に、何て大きなお坊さんだと思った。（中略）小さい時に剃髪されて、厳格な寺院の育ちをなさったけれど、何処にも痛んだあとがない。よく例えに雲を衝くようなというそれで、そのお方が改良服で出歩かれる。質素な平凡な、田舎坊主、わるいけれどひとめはそうなのである。

それでお目にかかっていると、御前の大きなまはるで異った震撼を持ってくる。けれどもそれは何処までもゆたかな滋味で、人を圧するものではない。いくらお話していったって御前様から警句はきかれない。又きびしくお教えなさることもない。御前は決して能弁でなかった。もし管長、法主の仕事が人を説教するということならあるのだとしたら

大島徹水上人は不思議な位に困難な所をお歩きになった。上人はどんな苦悩にみちた場面に出席されても、決してその苦悩を他人にいわない不言実行の努力型であった。そしていつも上人の方から積極的に体当りしてゆき、必ず立派な成果を挙げられた。こうした上人の御一生を外からみると力強い何か特別な御手腕をお持ちであったように見受けられるわけであるが、ほんとは智謀とか策略とかによって解決された例はなかった。それより上人は誠意一途の方であった。だから上人の

御前ほど管長に不向きな方はなかったと、私は思っている。

それで私共は、ただお心やすく、世間ばなしをしたに過ぎない。ところがただ世間ばなしをしているのに、何となく常の心持と異ってくる。それが不思議であつた。私など始終動揺してまことに精神が定りにくい。いつでも何か悩んでいる。心の曇りがきれいに晴れるという時がない。そこ

へ御前様がいらっしゃると、私はただ前に坐つて御十念をいただく。そうすると不思議にしずまつて、心が明るく和らいでくる。楽になる。どういふお力なのか、何の特別なものもなくそれであつた。何ともいえぬ大きな滋味、小さい孫達までが「いらっしゃいませ」と皆おじぎにくる。何の愛想も仰しやらないけれども満足した」

黒光女史は、申すまでもなく新宿中村屋の



に 共 と 僧 行 加

十年一月二十二日、上人の枕元にその訃報がとどいた。当時は上人の病いがすでに重かった。家政女学校校長室に、上人を見舞った石橋誠道上人を相手に、「どうも苦しくて困りません。眠られないで困ります」とか「もうそろそろお迎えがありますかなあ」とか「いや早くお迎えにきてほしい」等と語っていた。ところが、ビハリボース氏の訃報を手にすると、上人

相馬愛蔵氏夫人であるが、十四才の時に洗礼を受けたキリスト教徒であつた。それが五十七歳（大正十四年）のとき、渡辺海旭先生の教化によって仏教に改宗され、海旭先生遷化後は、上人に帰依した人である。相馬氏といえ、印度革命の志士ビハリボースをかくまつて、長女の俊子さんと結婚を許したことでも有名である。

このビハリボース氏が亡くなって、昭和二

はむっくり頭をあげられて「すぐ上京する」といひだした。枕頭にいた人々は驚いたが、やさしく「汽車の切符が手に入りません」となだめると、「列車が駄目なら飛行機ならゆけましよう」といひだした。当時は丈夫な者でも空襲等のため旅行は容易でなかったし、また主治医の木村先生が許すわけもなかった。上人は氣ばかり急いでも、やはり身体の不自由がきかないので、周囲の人の反対を待つ

までもなく、とても上京できないと知って、
聞々とされた。ややあって、それならせめて
戒名をと、筆をとり寄せて戒名を記され、す
ぐボーニ氏霊前にそれを急送させた。

上人はその翌々日二十四日午前七時二十分
に御遷化になったことを思えば、上人の御氣
質がいかに激しいものであったかが知れる。
相馬家では、今でもこの上人絶筆の戒名を家
宝として保存している。

上人は、俗にいう「骨っばい」ところがあ
った。大声叱咤はもよりのこと、小言一つい
うにも大きな声をされたことがない。従って
上人は言葉上手で誠意の足りない者が一番お
嫌であった。上人の口から「あれはあかん」
と評された者があつたら、それが最後で、そ
の者は上人にお目にかかることすらできな
かった。その代り、誠実さはある者なら、上人
にただ一言「これをお願いします」といった
だけで、たとえ廢台（後年の増上寺では、古く
てきたない鉄製廢台を用いられていた）にお
られても、「うむ」といいながら起きあがっ
て、その場ですぐ処理して下さった。美辭麗
句は御自分もいわず、他人から聞くのもお嫌

いであつた。すべては実行によって示される
風であつた。

上人の増上寺晋山式は、昭和九年十二月十
五日で、その翌年に二・二六事件があつた。

その日、上人は鶴沼の本真寺におられたが、
事件を聞くと、直ちに東京に馳せもどつてこ
られた。そして上人は、事件で殉死した高橋
是清、渡辺錠太郎の両家を弔問し、霊前に進
んで読経回願し、家人にも悠々として迫らぬ
態度で挨拶されて増上寺に帰つてこられた。

宮場、首相官邸、警視庁、その他要人のいる
所は、着剣の兵で固められ、街には機関銃が
据えられていたので誰もが驚いた。やがて反
乱軍が要所を占領したことを知った人々も、
どれが反乱軍なのやら、またいつ市街戦が始
まるのやら判らなかつた。一時は乗物はな
く、交通をしゃ断された区域があり、ラヂオ
はその地区の待避命令を伝えていた。この大
混乱の中を上人は、反乱軍に殺された巨頭の
所を弔問したということは、上人の豪胆さを
示すことには相違ないが、ただそればかりの
話でない。上人はこの事件を聞いて、ちゅう
踏することなく所僧を明らかにされたことに

外ならない。つまりそれ以前の軍部の動向、
世論の流れに対する一見識を実行に移された
のである。おつきの者の方が、青くなつてし
まい、中には増上寺に帰つてからも足のふる
えがとまらなかつたそうだが、無理のないこ
とであつた。

上人は所僧を貫く実行の人であつた。また
信念の人ともいえる。昭和十六年頃といえ
ば日支事変がますます深みに陥つていた。当時
の権力者はもちろん軍部であつた。その軍部
の重鎮でもあり、一般からも好評を受けてい
た人に林銑十郎大將があつた。上人が秋田、
新潟と御親教を続けられていた途中の列車の
中で、上人の座席と向き合つて林大將が座席
を占めたことがある。その時は上人は戦死者
合同慰霊祭に導師を勤めるためであり、林大
將は軍代表として参列するためであつた。し
ばらくしてから、何しろ林大將といえ、飛
ぶ鳥も落す威姿のあつた人なので、おつきが
心配し、上人の耳許で「前にいる人は林閣下
です」と上人に注進した。すると上人は「知
つとる」と大声で一言いっただまき、知らぬ顔
で外の景色を眺めておられた。その内に今度

は林大將の副官の方が心配になったのか、少佐副官が林大將の名詞を持って、上人に挨拶をした。それから上人と林大將は、目的地につくまで愉快そうに雑談のなを咲かせた。この話は、権力に媚びないとかどうとかいうばかりでなく、同じ慰霊祭に出席する者でも、上人は御自分が導師を勤めるために列車に乗っているという気魄がそうさせたものである。後になって上人は、「たとえ林大將にしろ、わしから声をかけるいわれはない」と申された言葉の中に、このことがくみとられた。

上人は相手が軍人だから好きとか嫌いとかいうのでなかった。松井石根大將が、熱海伊豆山に怨親平等の興亜觀音を建立するときは、上人は天上の画に堂本印象画伯を依頼したり、昭和十五年二月二十四日の開眼式には導師を勤められたりした。その後も松井大將とは別懇の間柄であった。

その当時から、増上寺の境内地問題、寺有地問題はなかなかの難問題であった。寺務所でも交渉がはかどらず困っていた。ある時、上人は御自身で財務局に出掛けてゆかれた。

いろいろ話をされても仲々はかどらない。そこで上人は、それならそちらの地図を拝見したいと申入れた。やがて役人が一枚の地図を大切そうに差し出すと、上人はそれを受け取り、仔細に見ようとせず、いきなり地図をまるめてストープに投げ込んでしまった。

そして「こんな地図を基にしているから話が括まらんのじゃ」といい、あつげにとられた役人達をしり目に帰ってきてしまった。このストープ事件が役に立ったかどうかは別に、その後一応は土地問題も解決したそうである。ある人の曰く、「あの時書類の手續（登記のことか）をしっかりとっておけばよかった」と。

議論よりも実行ということの一つに、話ではめんどろだとはかり、増上寺から逃げ出そうとされたことがあった。昭和二十五年五月二十五日の空襲で、三門と寺務所を除いてすべてが灰塵に帰したが、当時は、大殿の外に景光殿と總和殿があった。景光殿は以前からあったが、總和殿は昭和十五年が増上寺御開山の五百回忌に相当したので、その記念事業として造られ、昭和十六年に完成した百十坪

の大書院であった。寺務所の人達は、お居間が古くて汚いので、總和殿もできたことだし、立派な景光殿の方にお居間を移そうと考えた。ところが上人は、いくら古くても、代々の大僧正の住われた所であるからといって、たとえ汚くてもお居間を移転することを承知されなかった。

ところが何かの行き違いであろうか、寺務所の人達がお居間を幼稚園の一部に改装すべく工事を開始してしまった。そこで上人は、ご自分の荷物を括めて大八車に積み込んでしまった。おつきの一人が車のかじ棒を握り、上人は車の後押しをされて、まさに何処かに引越そうとされる所であった。丁度その時、相馬愛蔵氏が上人を訪ねて自動車で増上寺に着いた。みると上人は大八車の後押しをされていた。聞けば、これからおつきの者と二人で、近くの通元院に引き越すのだという。驚いた相馬氏は、とに角上人にお居間にもどってほしい、引越は一時延期していただいた。これが縁になって、上人はその後しばしば通元院に泊られた。また相馬氏が増上寺と縁を切ったのもその時以来であった。

何しろ当時の増上寺を物語る珍談がある。

「こちらは作田ですが、上人はおられますか」

「作田さんとはどなたですか」

「代議士の作田です」

「ダイギシとは何んですか」

「君は代議士を知らんのかね」

「何を、この馬鹿野郎……」

電話口で喧嘩して、作田氏をカンカンに怒らせてしまった位の稀有の得がたいものである。当時、作田高太郎氏は増上寺境内地問題で非常に尽力し後援され、上人とも特別な関係にあり、増上寺にとって誰知らぬものなない恩人であった。

ある時、上人は「嫌がれている所にいることは面白くない」といわれた。上人が増上寺後董が決定するまでに、地元の東京に異論があった。つまり候補にしたい人が二人あり、互に甲論乙駁が行われた。上人の言葉は聞いたとき、この間の事情を意味していると思つたが、事実はもっと卑近のことであつたと後になって気がついた。

上人が袈衣を着し袈裟をつけられると堂々

たる偉容であつた。しかし二十歳前後の上人は、背ばかり高くて瘦せておられた。胸の疾患であつた。上人の病氣は、薬や食餌で治したのでなく、規則正しい日課の生活で治された。冷水摩擦、深呼吸、境内や海辺の散歩と日課が定められていた。「わしの病氣は海辺の空気で治した」と御自分でいわれた通り、海辺の深呼吸も日課であつた。

酒、煙草をおのみにならぬはもちろん、辛いもの、酸いものを嫌い、抹茶、煎茶を好まれなかつた。いつもはぶ茶で、これでないと白湯であつた。旅先きで、特に海に近い所ではわざわざ宿まで鮮魚を届けてくれる僧者があつた。そんな時は喜んで受取るが、食べる方はお供の者であつた。上人は肉食であつたが決して好き嫌いをいわなかつた。いつか西田直二郎氏宅で御馳走になつた野菜サラダが気に入つて、その後も西田夫人に電話で、「精進の西洋料理」を無心するのであつた。御自分は全くの精進料理だが、他人には肉食をすすめられた。家政女学校に上人を訪ねると、早速肉屋の生徒の家に電話をかけて牛肉を取り寄せられた。

晩年になつてから牛乳が身体によいと勧められて、毎日二合お飲みになつた。この牛乳は毎日自動車で中村屋から届けられたので、栄養のためばかりでなくて相馬氏の厚情に感謝して飲まれていた。

上人の口ぐせの言葉に「金が欲しい」というのがあつた。ある人が「大島先生には、妻子はなし、衣も食も住も金がかからないし、なんにも道楽がないのに、なんでそんなにお金が必要なのですか」と尋ねたら、上人は「それでも金が欲しい」と申された。上人の頭の中には、貧乏の復興、学校の経営がいつもあつたので、若し金が入手できたらと常に考えていたからである。事実ご自身では金は要らなかつた。

話が段々細かになつて恐縮なので、上人の居睡りの話、節候の話等是有名であるが略することにする。要するに世間には善言を好む者は多いが、仲々言葉通りにゆかぬ人もある。上人は黙つて語らぬけれど、内に黄金を蔵していた人であつた。

浄土八月号に雷雨律師の細伝が大橋俊雄君に由って発表された、律師にたいしてあれ以上の詳伝はあるまい大橋君の努力に感謝する。

ところが、こぼればなしがある。

二、あるとき所用あつて京都の町へ出た、急の雷雨のためにとある寺の門にさけた、それは四条の寺町であつた、なかなかやまない。退屈

雷雨律師 こぼれ話

しのぎに玄關へ進んで待ったが未だやまない。障紙のやぶれ目から見ると小僧の机に本がある、そつと取って見ると、号令本願抄である。

一、寂居在山の砌り、天台の教えはとても今生の出離解脱は難事として、有縁の教法を山王権現に一百日祈願された、願みちて自坊に帰るとき願きて地に倒んとした、あやうくふみ止まって後を顧ると、錆びた古刀であつた、取りあげて、古刀、錆かたな、おお、この通り無漏智刃さびて生死の

「それ、八千随情の法門は、皆これ苦海を渡るの法船なりと雖も、六八起世の本願のみ、ひとり常設を済ふの教綱なり、これ即ち、五知思惟の善巧九品往生の法門なるものをや」

の一文に接して感動たかく、これだこれだと随喜無量であつた、つぎつぎと読む内に

雨は既にはれてゐた、住僧に請うて山に持参して精読された。これが意を決して山下住徳住となつた云々。

以上は僕が小僧の時にきんす場に居て聴いた老僧の説教である、小僧ながら感に打たれた。今にして想へば此老僧は雷雨さんと面語していられたらしい。

細伝では徳住往訪の時に雷雨であつた故に雷雨であるが、そうかもしれぬ、けれど説教伝の如く傳命本願抄に遭うたは雷雨のおかげであつた、故に雷雨かもしれぬ、或は二回あつたのかもしれない。

僕のは小僧の時の説教話であるからあてにならね、單なるこぼれ話にすぎぬ、なれどもこぼればなしをこぼれ話として伝へるも一興なしと考へ、よつてここにこぼすものなり。

(法 譽 晩 香)

新宗教問答

——自己暗示にかかった人との對話——



耶麻乃葦生

「ねえ、奥さん」

「……………」

「ほんとに今日は御苦労様でしたね」

「あなたもね」

「わたしは、ほんとに神さまが有難くてね、

奥様に勧められて神さまを信じるようになってから、ほんとによいことをしたと思っております。家が建ってき、これもほんとにみんな神様のお蔭だと思いますの」

「うちの神さまだけは本当にいいでしょ…」

「そう……神さまのお蔭で家を建てさせて頂

いたんですもの、こんな有難いことったらないんですの……早く皆さん方、もつともつと多勢信じるようになるといいですわね。今日の人もきつといらっしゃるでしょ。」

これは大きな数珠を手にし、いかにも、ものの腰の低い五十歳年輩の御婦人と、もう一人は、これも同じく大きな数珠を前帯の間にはさんだ、一見同年輩とみえる上品そうな一寸すました外達らしい御婦人との對話である。

この二人はそばを註文していた。そばを待つ間の話はまことに神妙であつた。

る。「ははあ……この二人は……」と大体推量

が出来た。

「あのー大変失礼ですが、奥様なかなか御立派ですね」

「……………」

突然私に話しかけられた二人の御婦人はちよつと奇異な目つきで私たちの方をみた。

「神さまのお蔭で家が建ったなんてお考えになる奥様、ほんとに偉いと思いますわね」

二人の婦人はますます不思議そうな顔をして私の顔をみていた。

私は珍らしく長びいた今日の職員会、二人共同村で、家まで小一時間もかかる為、ちよつとそばでも食べようかと、M教師と町のそば屋に入っていま食べ終って一ぶくしていた時であつた。隣に腰をかけられた二人の御婦人の話が耳に入った。私は今毎日洋服姿で学校に来て教員こそしているが、寺に生を受けて以来四十年間、根が和尚だけに、こんな話となると敏感であ

「私はねー実は教員をやっているんですが、今の生徒たちは、兎角自分一人で大きくなり、自分一人で勉強しているかのように考えている者が多いんですが、奥様の様に、お蔭で……させて頂いたなんて感謝の念のある人はほんとに見上げたものだと思いますよ。」この言葉にお二人は漸く納得したらしく、うちとけた顔になって来た。

「ええ、ほんとにわたしはね、神さまのお蔭で家を建てさせて頂いたんで……もうそれは有難くてね」

「うちの神さまは、本当に、あらたかでね、何んでも人の念いがかないますの」

「それで今日もわたしはね、この幹部さんと御一緒にこちらに参ったんですよ」

幹部級の奥様はちょっと、すました顔をしている。

「そうですか、人の念い何んでもかなうなんて、本当に結構ですね、それこそあらたかで、御立派な神さまなんです、一体どんな、御宗教ですか」

「ほれ○○町に大きな御殿の建たっている○○会ですよ」

すっかり、私の想像した新興宗教○○会であつた。私はいささか馬鹿らしくなつて来た。この幹部婦人は、家が建たつて有難く満ち足りている御婦人信者を保証人として引きつれて、自分の○○会信者になればこんなにも御利益があると当地に勧誘に出掛けた婦人である。ここまで話が来ると、馬鹿らしいからといって話を止めるわけにもいかず、好な心も手伝つて更に話を続けたのであつた。

「貴会の神さまは、ずい分と御利益があるようですが、何という神さまなのでしょう。」

幹部婦人は答えた。

「わたしどもの神さまはね、シャカムニというんです。」

私はびっくりして、自分の耳を疑つたくらい。シャカムニという神さま？ これは大変なこと……更に続けて聞いた。

「貴会の神さまが、シャカムニ？」

「ええ、そうなんですね、シャカムニは印度にお生れになったんですが、わたしたちの神さまなんです。」

「そのシャカムニという神さまにお参りして

いるというわけですか」

「ええ、○○さまという、組師の生神さまのお写真と共に、この神さまにもお参りするのですよ」

こんどは生神さまが現われた。

「それで一体、その組師の生神さまとシャカムニとは、どちらが偉いんですか」

「それは勿論、生神さまの○○さまの方が偉いんですとも」

これを聞いた私は少々奮がしたが、相手が御婦人では仕方がない。

「シャカムニは印度にお生れになったと云われたが、三千年前に出世をされたお釈迦様のことなのでしょうね」

「ええ、そうですとも」

「そうですか、お釈迦様が神さまだなんて、私、はじめて聞きましたよ。それに会祖の○○様の方が偉いなんて……」

「わたしどもの会では、神さまになっているんです。会祖の○○様は実に御立派な方なので全く偉い人ですよ。わたくしたちにどんな幸福でも与えて下さる人ですもの」

余りに馬鹿げた話になって来たと同時に、

この御婦人の信仰に衰れさえ出て来た。

「ねー奥さん、私は小学校の時、先生から、お釈迦様は、今から約三千年の昔、印度にお生れになった人で、悟を開かれて、仏陀と名られたと聞いているが、シャカムニは神さまでなくて仏さまでしょうね」

「……」

「今でも、誰もがいつていますよ。仏さまと、神さまというのは、もちろんいらいっしやるのが、神さまは八百万の神々といつて、わたしたちの、どこの家でも、お祭してあるわけですよ。天皇様でさえ、現神、生神といふことを止めて、人間天皇と名られておられるではないですか、まして会祖が、どんなにお偉いからって生神さまだなんて、おかしいじゃありませんか。」

私は、小学校の先生を信じています。中学の先生でも……みな、釈迦はホトケだと教えて下さった。今それがカミということになれば、文部省から訂正なければならぬでしょうね。私は先生の言われること、教科書に書かれていることは、みんな本当のことだと思っておりますがね」

「……」

御婦人達は無言であつたが、別にうなずきもしないで、到着したそばを神妙に食していた。やがて終つて、幹部婦人は再び口を開いた。

「わたしたちの会では他の神など一切認めないです。わたし共のように、こうして信じる者だけに、神さまの加護があり、お導きがあつて救われるのです。現にこの方も家に不災難が続き、それは随分と因つたのでしたが、入会されて救われ、家まで建つたのでしてね。わたしなども、不孝な子供に随分といじめられたものでしたが、今は全く幸福ですよ。」

「ま、この世は苦の娑婆といひますから、誰れしも苦労はあることでしようね、せめて心の幸を招くのが信仰でしょうが、信仰の道にも色々あつてね、でも正しい信仰をして参りたいものですね、奥さん」
それと、言わんばかりに幹部婦人は言葉をつけた。

「キリストも仏教も、あれはみんなうそですよ、わたし共の神さまだけが、只一つ教いを

熊野の猿

祖父は先祖の業をついで壮年より我懸泉堂に医業を開いて居たが、只その道に熱心なばかりでなく、殖産興業にも心を用い、又能く郷党の教育にも尽された事はその跡により知る事ができる。一二の事例を挙げて見よう。

我郷人は昔から痘瘡を怖るる事甚だしく、これに罹つた者は、人家に遠き溪谷に持ち出し養生させたとそうで、土俗違反（いしずえがえし）というた位で、中産以下の者で、痘を病んだ家は死滅するか、さなくば家産を没したもので、天保年間私の近隣で、小船で親子三人とかで、大阪通いをして居たものがあつた。それが大阪の川で新しい爛痘利の流れでくるのを拾うて、持ち帰つた処が、痘瘡患者でも用いたものであつたか、船中から痘を病んで家内に伝染し、非常に難儀をして終に破産にまで至つたという。こんな風である故他國に交通することを嫌ひ固陋益固陋となり、終に熊野嶺とまで潮けらるるに至つたという。祖父は常にそれを教へて居た。処が蘭人が牛痘を輸入し、京都でもこれを行うということを知り、自ら上洛して其流を伝え、逸早く郷人に施した。当時の往復信書は家宝として珍藏して居る。

（熊野山房「懐旧」より）

もたらず神さまで、信者になってこそ、お導き下さるのでしてね」

「はあ、そうですね、キリスト教では天国を慕い、仏教では西方のお浄土を欣求する。信者はやがてそこに救われるのだと聞いておりましたが、じゃあ、みんなうそなんですか？」

「ええ、みんな人間というものは、この神さまに救われるのでしてね、それ証拠に坊さんの渡された引導ぐらいいで、極楽へなんか行けるのではないんですよ」

全く、いい気になって聞いていれば、どんなことにもなりかねないお説法、私は馬鹿氣た話もほどほどなものだと思ひながら、

「そうですね、和尚さんの引導では、極楽往生が出来ませんか、でも私はね、亡くなった人に和尚さんが引導を渡したが、極楽へ行けず、家の隅りや、この世の中でうろろろしていたなにかみることがないですね。奥さんだって、みたことないでしょう。もし亡霊が成仏出来ずこの世にいたとするなら、それこそ和尚さんの御回向に会わなかった人で、正しい読経と引導を授けられた人は皆、極楽

の仏様のみ許に参っていますよ。奥様の御両親も共にね」

「でもね、この頃入会された、ある御婦人の方の家なんか、お母さんが七〇余歳ぐらいいなるんですが、長年の罹りてそれは因つていたものでしてね、それが入会されて、毎日お詣りに来られると、どうですか、御老母さんの病気が次第によくなつて、ほとんどよくなつてしまつたんですよ」

「そうですね、それはまあ、どなたにしても病気がよくなればこんな結構なことではないですね」

御婦人は得意然たるものである。続けていつた。

「ところが快くなつたもので、時々お詣りを欠くようになったんですよ、すると、また御老母さんの容態が悪くなりましてね、こんなに私どもの神様は、靈驗あらたかですてね」

「そうですね、それは不思議ですね、よくなつたり、悪くなつたりするのは、神様のせいですかね……？」

「そうですね、みな神様がそうさせるのですね、もうこんなにあらたかな神様は外

には、ぜつたにないですね」

全く御婦人は、それみよといわんばかりに得意満々たるものであつた。

「奥様それは、どうも神様のせいではないでしょうね、病人の容態に一進一退のあることは当然で……」と言葉の進まない中に、

「ええ、これは神様が罰を与えるのですよ、お詣りを欠くと、神様がおおこりになつてね……」

靈妙な証書にでもなるかの如く、全く鼻を高くしている。お付添いの信者婦人も神妙た中にどこか、誇らしげな面もちである。

「そうですね、神様が罰を人間に与えるんですか……」

「ええ、そうですね……」

「そうですね、靈驗あらたなことよくわかりました。けれどもね奥様、お詣りをすれば功德を与え、さばれば罰を与える神様なんて、根性が小さいですね、本当の神様はそんなに根性が小さいものではないでしょうね。もっと大乗的なもの、無量寿・無量光といい、大慈大悲といえますから、真の神様、仏様はもっともつと規模の大きいものだと思いますよ……」。



(山 門)

安土の蟋蟀こおろぎ

——浄厳院に詣で——

鈴木成元

んで、醸し出す好景は実によく、お寺を見あきた私の胸にもぐっとせまるものがある。

東海道線を下り、安土を過ぎると左側田圃の真中に大きなお寺が見える。これが浄厳院である。有名なお寺であるから離しも遠くない。

訪れた人は少ないようである。成程天正年間（一五八〇頃）における安土は、織田信長の築城とともに、多くの武士や商人がこの町に住み、非常に繁栄したのであることは想像出来る。けれども現在は農業本位の町であり、

繁華な様子は見当らない。実に落着いた町で、松林に覆われた安土城址と町内に二、三残っている土塀囲いの武家屋敷は、問わず語りに当時の様子を物語ってくれる。城下を洗

旅の楽しみには種々あるけれども、変る景色の面白さは、小学唱歌ばかりではないようである。その景色の中でもひとは目につくのはお寺である。多くの民家から比較すると、それは何パーセントかの微々たるものかもしれない。けれども鉄道の沿線に見える特殊な建築様式は、旅人の眼を十分に楽しませてくれる。お寺にも大小様々あり、地方によってその形も異なるが、各地方の景色の中にとけ込

であろうか、遠慮深げに少し離れて、重い体を横たえているようである。

安土城は平城の代表的な城のようにいわれているが、それはとんでもない間違いで、前には琵琶湖、後は山という地理的条件に恵まれた堅固な城であった。華屋をつくしたその天守閣が残っていれば、唯一の観光地になっていたことであろう。安土のプラットホームから小高い城址を眺めていると、青葉に包まれた山の上に白亜の城が浮んで来るようである。しかし、もし安土城が残っておれば、安土の町もすっかり観光地化してしまい、現在のような落着いた情緒はなくなっていたことであろう。このことは史跡ブームの観光地全般についていえることである。奥州平泉でさ

えその素材は失われ、春雨も降り残した金色堂も、最早芭蕉のそれは感じられない。しつこい土塵光屋に腹を立てるのは私一人であらうか。

愚論はぬきにして、安土城址からみる好景はすばらしい。左手にはちよびり白い帽子をかぶった鈴鹿の山々がそびえ、右手には円形に入り込んだ琵琶湖が静かに横たわり、その間に散在する安土集落は、美しく整理された箱庭のようである。ふと気がついて自分の立っている足場を見ると、そこは焼失した天主閣の跡で、崩れかかった石垣に、無心の草がぼうぼうと生え、

国被在山河 城春草木深

とよんだ杜甫の句が脳裏をかすめる。

年々歳々花相似 歳々年々人不同

とよんだ劉廷芝の句も、ここに来れば理解が出来、夕暮時などロマンチストでなくともグツと来るものがあるであらう。もっともそれを眺めるまでにあえぎながら登る急な、しかも七曲する石段も、一層強い感じを出す要素には相違ない。

浄厳院は天正六年（一五七八）、信長の安土

築城と同時に建てられたものである。寺は城址より約二千米離れた田圃の真中にある。ここには天台宗の慈恩寺という寺があった。慈恩寺は佐々木義賢・義治が信長と争った五七〇、佐々木義賢・義治が信長と争った際、信長の将柴田勝家・佐久間信盛と戦って破れ、その時この慈恩寺も焼き払われた。その跡に信長が多賀の興隆寺の堂宇をこの地に移し、隆善法印のゆかりの地である金勝の阿弥陀寺の明感上人を招いて、その名も金勝山浄厳院慈恩寺とし、浄土宗の寺院としたものである。だから現在まで続いている全ての建築物は、天正年間に建てられたものではあるが、鎌倉時代の建築様式を十分に残している。いやそれ以上に古いものかも知れない。

天台宗の興隆寺を移したためではあるが、何処となく天台寺院の臭みはまぬかれない。しかしこれだけの古い伽藍を揃え、しかも大規模な建築は、現在の浄土宗寺院には少ない。勿論これらの殆んど全ては重要文化財であり、修築する準備も着々進められているようである。今のうちに手を加えて長く保存した

いと思うのは、一人私のみではないであらう。

数多い建築物の中、最も秀れているものは楼門である。楼門には様々な種類があるが、この種の門はまずないのでなかろうか。実に素朴な三間一戸重層門であるが、珍らしく切妻造りの屋根である。我國最古の楼建築



(本 堂)

である法隆寺の経楼や鐘楼は切妻造りであるが、その類例は少ない。強いてこの浄厳院の楼門に似てる門を挙げれば、十三世紀に建立された滝山寺三門（愛知）や円鏡寺楼門（岐阜）または大野神社楼門（滋賀）であろう。

しかしこれらの楼門は皆入母屋造りであるから相似とはいいいにくい。滝山寺三門の屋根が八坂神社楼門（十五世紀）の屋根と交換した形が浄厳院の楼門である。近年瓦換えをして往年の形が失したのは誠に惜しまれる。

楼門をくぐると長い石畳が本堂まで続いており、両側にある大きな四つの燈籠も何となく小さく見える。それは境内の広さもあり、真東に建てられた大きな本堂のためでもある。どっしりと落着いた本堂は圧迫感さえ与える。それはまた私の先入感も手伝ったことかもしれない。というのは浄厳院が建った翌年、天正七年五月二十七日に、有名な安土宗論がこの本堂で行われ、日蓮宗が完敗したのである。そしてこの事件は多くの学者の話題を呼び、今なおその尾を引いている。そんなことを頭に浮べつつ本堂の内部を拝見した私は、より一層の緊張感を覚え、あ

たかも宗論が眼前でくりひろげられているような錯覚に落ち入った。そして当時はそれらの様子を凝視したであろう本尊仏をはじめ、美しく飾られている装飾具は、一見何事もなかったような涼しい顔をしているが、その反面そつと耳もとで囁いているようでもある。

庭の西隅には釈迦堂と薬師堂がある。何の飾りもなく気持がよい。恐らくこの建物が一番古いのではなからうか。中に安置されている釈迦像・薬師像も見事なもので、伝来の由を伝えており、こんな片田舎に人目をさけて安置されているのは勿体なく、気の毒である。ことに釈迦像は嵯峨の清涼寺にあるそれと全く同じような仏像で、珍らしいものである。また本堂の後、裏門に入ってすぐ右手に観音堂があり、これも前の二つに勝るとも劣らない立派なものである。これらの建物は朽ち果ててはいるが、そこにまた何ともいえない情緒がある。大きな本堂よりもむしろこちらに心を引かれたのは私の辺見であろうか。

浄厳院の開山は隆堯法印となっている。ところが法印の示寂は宝徳元年（一四四九）である。その間約百三十年の隔りがある。だから法印在世時代には開山になるはずがない。浄厳院が創られた時は金勝の阿弥陀寺の第八世明感上人の時代であり、織田信長は浄厳院を造って明感上人を招き、明感上人はまた金勝の阿弥陀寺の開山隆堯法印をこの浄厳院の開山と仰いだ。だから阿弥陀寺の第八世と浄厳院の第八世までは全く同じである。けれども事実の上では浄厳院の開山は明感上人ということになる。すなわち隆堯法印は「送り開山」とか「名譽開山」という方が妥当であろう。

それはともかくとして天正年間における浄厳院は、信長の命により近江・伊賀の浄土宗の寺院八百八カ寺を末寺とし、一条派の根本道場として、飛鳥も落す勢であったが、信長の死後衰退の一路をたどった。もし信長が本能寺の変で死なずに長寿であったら、或は浄土宗の大本山になっていたことであろう。夕暮近い境内の草むらで、何匹かの蟋蟀が、辺りの静けさを破って、我が世の秋と鳴き続けていた。それはあたかも寺伝を謳歌するかのようであったが、何となく寂しさと呼び無常を感じた。

浄土歌壇

岩野喜久代選



天

鹿兒島 串間 君江

庭の木に蟬なきそめて何となく広
き屋敷にわが住むごとし

評 この感覺は短歌の本質につな
がるものです。狭い庭が広大な
屋敷に思へるせみしぐれの爽か
さ、その中に快よく身を浸し
て、夏を楽しんでゐる作者のゆ
たかな思ひが、よく現はれてゐ
ます。

地

東京 牧尾優満子

日盛りの運河に沿ひて梅干を干し
たる匂ひする道を行く

評 日盛り、運河、梅干の匂ひと
直夏のあつさを思はせる道具立
は揃ひました。作者は赫灼と照
る日の下を汗をふき、キラ
／＼光る水面と、運河の悪臭に
閉口しながら歩いてゐるたのでせ
う。その時、どこかの家で干す

梅干の酸い匂ひが、漂つて来た
ので、あつて辛い心持がふつ
と救はれたのだとおもひます。
いかにも猛暑を思はせるうまい
歌です。

人

沼津 小野 徳司

たくましく海女のをとめら踏み行
けり岬の端の昼顔のつる

評 はつらつとした梅女の娘さん
達かひる顔の生へた沙をふんで
岬へ働きに行く、みじんも感傷
を交へぬ、縁の太いいいき
した歌です。

小田原 中里 史子

糊加減ほどよき浴衣の肌ざはりわ
がいとなみの小さき幸かな

世の中のつまらなさをば見つし
て暑き初秋を芝居見に入る

東京 二宮 綾子

案内して白鳳仏のみ厨子をば開け
ては閉づる内陣の秋

大阪 山村 綾子

信濃川ゆたかに広く海に入りし
る光る川口水

鹿兒島 長崎 恒子

浜木綿のつぼみに似たりしなやか
に頬にあて給ふ菩薩のみ指

大 阪 清水 幸治

やよ母よまたわれ生れ代り来て孝
養せんと云ひし口癖

神奈川 熊 坂 満

白髪結頭矢口渡の頓兵衛に似る人
と待つ街道のバス

東京 小宮 みち

せみしぐれ蟲に代りて九月なり背
戸は芙蓉のそこごとく咲く

青 森 向井 きつ

からからと日除けのテント下すな
り今日の日課のこれに始る

川 内 児島登喜子

死なざれば治らぬ我れの病なり同
じく治らぬ我れの性なり

兵 庫 野口かずあ

夏の来てわが保育所の靴箱は赤、
白、黄なるサンダル並ぶ

田辺獅子蔵

人々の喜寿の祝ひを余所に見しわ
が身も遂に喜寿となりたり

福岡 吉原 真竜

大殿に念仏の声きこゆるに枕もた
げて南無阿弥陀仏

名古屋 堀江 泰子

偶然と云ふは下凡の妄想にてた
だ何事も必然なりき

東京 山田 繁子

わが友を乳ふくませてさも我れは
世に勝てりとも云はんばかりに

東京 葛岡 利子

勤評にたたかひ来りし教師われ家
に帰れば子を抱く母

高 岡 竹上 盛衛

夕映をうつせる瀉に丹塗なる弁才
天のみ社の浮く

高 岡 八島 美雄

父と今ぬかづく墓にきらめきし花
のしづくの一つこぼれり

高 岡 山本 係子

生花の水とりかへて対座せばそこ
ここに啼くこほろぎの声

富山 匠久 枝

つつましく命生きたし瓶の百合風
のそよとゆるるたそがれ

東京 京地 美夫

よべの雨不忍池の蓮の葉に涼しき
玉となりてまろべる

東京 洪川 敬子

いさかひし日は昔にて友とせし旅

亡き夫を憶う

岩田陵子



旅立ちし峠を追って秋の月

今にしても夫を思うとき私の慕情はつきからつきえと私の心にうずきます。

夫は平等寺の住職と、富士宮北高等学校の教諭。昭和十九年には少尉として、中支へ出征して一人三役をしておりました。大へん常時健康で私と結婚しまして二十四年三カ月の間、病氣らしい病氣はした事がなく大へん丈夫な夫でした。その間御本堂の新築もいたしまして、寺内も完備させて戴く事が出来ました。

昭和三十一年七月八日まで学校へ通勤していましたが、どうも胃が変で戻す事が三日四

日続きましたので、医師の診察を受けました所、どうも変だといわれましたので早速郷里名古屋の吉田博士に七月十三日に出力して戴きました。所が思いもかけぬ胃癌の診断をされました。千仞の谷より落ちた氣持を顔にも出さず夫にだまって看護に専心しました。お蔭様で三週間で退院致し、八月中静養しました所思った程でなく元氣になり、私もこの分では大丈夫と思いましたが、大手術の後ですから十分に氣をつけるように最善の注意をしていました。

九月一日の新学期にはどうしても登校するといつて聞きません。「大手術でしたから学

校は二学期は休ませて戴いて」と泣いて頼みましても「お前の心配する程ではないから」といって元氣に出動しまして、十月二十一日まで行っておりまして。二十二日より休み、医師に診察を受けました所どうも癌の再発らしいようですといわれ、何人かの先生に診察をお願いしましたが、二十三日の朝七時頃全身癌でもう一カ月の命も受け合へない。「手術も不能」あーこんな冷徹の事実を下されるとはみ仏様の外に誰が知る事が出来まじょうか。夫に今日まで癌という事を知らせずに来ましたのに、どうして打開けようと思案に迷い、阿弥陀様の前へ行きました。落ちつこうとする私の頬に幾すじの涙が流れたことでしよう。「平素から最後の時には医師がお前に申されるから隠さずにおしえてくれ」と申して居ましたので、断腸の思いで話しし所、平素と変りなく「やっぱり癌だったのかよく話してくれた、それでこそ僕の妻だ」と反対にはげましてくれました。

「生ある者は必ず滅びる。これは宇宙の法則だ。ただその時期があるが、僕は五十二歳だから花にたとえれば八分咲き後の二分は人間

の力でどうする事も出来ない。其の時にはきっぱりと諦める事が大切なのだ。その積りで僕のなき後も元気で、ほがらかに暮らしたさい。悲しい時、困る時、又人間は星のへりの如く真直に歩けないものであるから、其の時には僕の写真の前に来て静かに合掌して三十分でも一時間でもいいなさい。お前の行くべき道、安心を教えてやるよ」とやさしく申し。「さあさあぐずぐずしてはられない、僕の頭のはっきりしている間に寺の帳簿、岳陽組長簿、仏教会計簿を持参させて整理の後、後継者を呼び、今と云う場合遠慮している時ではない、養子だからと云って遠慮せず聞きたい事、どんな事でも聞きなさい。僕の知っている事も全部いっておく。息のある間だけだよ」と申し私には「お前はがさがさしているし来客も多いから、何んでもノートしておきなさい。学校関係へ葬式の通知を出すのにも校長宛で出しても他の先生方も大勢来て下さると思う。食事の仕度はその余裕を見ておかないとまごついて困るよ」等とその他、数えきれない色々の心やりを思うだに胸がいっぱいです。そして二十三日の夜八時頃総代の

方々に来て戴き、最後のお礼及びお願い。雑談を夜十一時までしていました。

其の間もラジオをかけ通しでそれから総代の方が「方丈さんラジオがうるさいでしょうね」と申されました処「いやラジオもそう長く聞く事も出来ないから、死ぬまでゆっくり聞くだすよ」と苦痛のない、平素と同じ如く申しますので、総代の方々も、こんなに元気で「くくなるもの」でしょうか。一度名古屋の吉

田博士の元へ電話で聞いて一度往診をたのんでは、といわれたので、早速連絡を取りました所悲しい予感はある中しました。「手術は不能、生命は絶望なのです」奇蹟を信じつつ夜中まで看護する私に、床について休むようにいい、お前が起きていてくれれば僕の病気がなおるのならば一夜中おきて貰うけれども、どうせための体故お前の体の方が大切だ。さあ休みなさい。心配しなくてもよい。



(ありし日の御夫妻)

私もやむなくスタンドを消した。

月光がガラス越しにさんさんと輝いた静かな夜中でございます。夫は床に座し静かに目をつぶり一時間、二時間じっとしています。その姿は何んと出家の身であつても覺悟の出来るものかと、今までの夫という氣持よりも、清浄と申しましようか、一寸形容の出来ない尊嚴な氣がひしひしとせまる思いでございます。

翌二十五日、二十六日と檀家、学校、卒業生、知人等多い時には五十人余の見舞の方々に、私の方が主人の体を心配して面会をお断り申してはいたしました所「全快する病人ならば面会謝絶も絶対安静の必要もあるが、僕の場合には一人でも多くの方々にお目にかかりお礼を申すべきだ、どんどん通してくれ」と申し見舞客の方々にはほとんど座したまま、ニコニコと快談するので、皆様はこんな元氣でほんとに悪いのですかと申される次第です。元来夫は約束を守る事と人の悪口をいわないのです。約束も出来ない事は決してお引受けしない主義でした。その一例として檀家の八十歳になるおばあさんが常々「方丈さ

んにどうしても引導をさすけて貰うからどんな遠くへ旅行しても帰えつて来て下さい」と申されていたので、私に二十六日の朝車で迎えに行くようにとのこと、早速お連れして来ました。「おばあさんどうしても私が先に阿弥陀様の元へ行くようになりましたから約束の引導をさすける事が出来ないで後の住職に頼んで行くから安心して下さい」と申すような訳でした。それでいて固いのみでなく、人様のする遊びは一通り何んでもする坊さん臭くない坊さんだと思います。

私達よく料理屋さんえ二人で行き御馳走もしてくれました。ですから私は常々寺庭婦人は、住職はその寺その土地により他の商売の方々のように派手に出来ないで、妻たる者が男の心理を察し外で味う事の出来ない分十分つくすように専心しましたので、自分も満足し、夫も世人の知る所とその点は公言出来ると自惚れても恥ないと思います。

二十六日の夜は「私と娘に謡曲を聞かせてくれ」と申しました。私はいつも下手とけなされているので「いやだ」と思いはしたものの、最後にでもなつて後で思残してはと出る

涙をかくして思い切つて「ツル、カメ」を娘とやろうとしました所、お前一人でやりなさいといひますので、やりました所、思ったより上手だよう決してけなさないから続けないと申し、娘と二人で竹生島をやりました。「でも今の場合ツル、カメでは一寸おめでたいのだから合わないから変だ、でもよいお前のが聞けたから」とニツコリ私を見て笑いました。今でもその顔が忘れられません。

翌二十七日も相変らず見舞客でいっぱいでした。夕方五時頃座敷の椅子に私と向い合ひ寺庭よりくつきり靈峰富士山がよく見えますので眺め「この富士山も永久に見る事が出来ない、ゆつくり眺めておこう」と申して見えています。そして私に茶色の封筒を渡し、「これはお前と一緒に来年銀婚式だから僕が好きなのを買ひ、二人でゆつくり旅行に行くべく貯金したお金五万円だがもう実現出来ない。今までお前に十分してやつてあるからいい、氣持だけ汲んでくれ、寺では本葬までは少し日がかかる。それまでの雑費に使いなさい」と申し渡され、私も胸いっぱい返事も出来ずにいました所へ、娘がお父様写真を

取りましようとした所、上手に取って頂戴、これが最後になるからニッコリ笑う、といひ、四枚取りました。何時間か後にこの世を去って行く人とはみ仏様より知る事が出来ません。凡夫の悲しさ。それから床につき二時間余り眠り八時頃目をさまし、私に、とても氣持がよい。こんなにいい氣分の事は今までに味わった事はない、今小学校の友達と二人で犬山城の下で四方見渡すかぎり美しい花園の下で色々と言語に耽っていた夢を見た」と申し私に「大変だが御本堂の掃除をしてくれ」と申すので私は「貴男のお側にいたいから女中さんにやらせます」といいましたが「お前ではなくてはだめだ用があれば呼ぶ。それに僕の所には皆がいてくれるから」といい聞きませんので、御本堂へ行き、御本尊様の前で一人静かに合掌をして夢中でした。

夜十一時頃夫が呼びますので参りました所、お湯を沢山沸かして体を拭いて貰いたいと申しますので、早速女中さんにたのみ夫の体をふきました所、自分は立ってどれだけ力が弱ったか等と申し「僕が亡くなってもふきなさいようにしていねいにね」次に洗面器

へ水をそしてハミガキ、ハブラシを持参させ、自分に丈夫の時と同じように、そしてひげは電気カミソリで自分でそり、これでさっぱりした。今度は顔をふいてくれと申すので水では冷めたいのでお湯をと申しました所が「何々お湯でも水でもいいよ今から二、三時間もしればすっ裸にされるから」と申しました。私は口も聞けない、表わしうのないこの氣持をお察し戴けると思います。

それから床の間に来迎仏の軸物をかけ焼香の仕度をするようにと、そして後住及び娘等皆呼んで、衣、袈裟と何時も持つて行く道具の入ったカバンをと申すので、いわれるままに持つて来ました。何事が初まるのかと夫のする事を眺めているのみです。皆お経の本を持ちなさい。僕は自分で枕経をあげるといつて三回静かに焼香をし、浄土宗の日常勤行の順序により、香燭より送仏偈まで約五十分間実に美しいすみ切った声であげました。終ると私の前にちゃんと座り「長い事妻としてよく僕を助けてくれた心から有難う」二女「お父さんはよい娘と思って今日まで来た。結婚するまで生きていたがこれは人間力でどう

する事も出来ない。お父さんの期待を破らないうでよい人になってくれ」後住「二女の事が心配だがどうか僕になにかわって頼む。寺の事は何もかも全部たのんだよ」身内者「長い間病氣中色々有難う。僕が亡くなっても仲良く元氣でくらして下さい。皆元氣で暮す様に」と申し私に衣をぬがせてくれ「お医者様はお前にもうすぐだめといわなかったか」ぼつぼつ先生がこられそうなのだ、と申しますので座敷の唐紙を明けました所、先生はお経が初まっているので入る事が出来ずに涙を出して聞いていられた訳です。すぐ夫の元へ行き「方丈さん如何ですか」「長い事有難うございました。私は自分の命が幾許もない事を知っています。先生もよくよせず私の死をみとどけて下さい」「では方丈さん医者として聞くのも変ですがどんな工合ですか」「体中の調子が全部くるって今までこんなになった事は一度もありません」それでは注射を打ちます」「先生待つて下さい何の注射ですか強心剤でしたらばやめて下さい。僕はもう心の準備も出来、家族の者にもお別れをしましたからこのまま静かに往生したい」と申

し、打たせません。それから先生が「これは苦しいのを止めるいたみ止です」「そうですか、それではお願いします」といって打って戴きました。「方丈さんは一時より床の上にすわり通しでは大へんですからお休み下さい」といわれ五分位床につきましたかと思ひますと、すぐ又起き、すわるうとしました。が、今度は中心が取れなく私が後から支えていました。すると「誰も話もしずお通夜のような雰囲気はいやだ、お前はいつもほがらで人を笑わせるのだから面白い話でもしてくれ、僕はそれを聞いて静かにあの世へ行くら」と申しましたが、何んで私のようなおしゃべりでも口が聞けましようか。

その中に大きな音を立てて手を打ち「はじまりはじまりしびんを持って来て下さい奥さん」とそのいい方が丁度歌舞伎での口上そっくり余りおもしろいので皆で泣き笑いと「もうよろしい」しばらくして「二度のはじまり」と申し又しびんを取りあげました所少々の小水が出ました。それを見て「先生いよいよ最後が近づきました」先生が「なぜです」「大便秘小水も出なくなれば人間死より外

はありません」といいつつ大きな呼吸を二度しましたので私が「苦しいですか」といえば「少しは苦しい」といいそれで私の腕にのりかかりなすってと申しますと、よりかかり二、三度皆の顔を見廻し大きく息を二、三回している内にのどがゴロゴロといい私の左の腕に抱かれて大往生しました。主人の腕の時計は三時半を知らせていました。

その時計はその時より主をかえて私の腕で毎日正確に時を知らせてくれます。肌身はなさず主人と思いつかしく毎日眺めては心をやわらげてくれる一つのマスコットです。床につきました二十二日より二十八日三時半までの間、よくも浄土宗の法然上人様の発願文の如く大往生が出来るものかとこの目で見、腕でしっかりと抱きながら尊敬と妻としての最愛の心で最後をみとる事の出来ました事は無上の喜びでございます。私は夫を腕に抱きながら娘二人と自分にいい聞かせました。

お父様は二度帰えられない旅にお立ちになる時さえも、このような立派な僧侶としての最後をされたのだから生きて行くには色々の苦難にぶつかる事が多くあると思うが其の時

にはこのお父様の最後を思い出して共に張切って行く事が菩提を葬う事と思う。お父様に約束してお別れを告げましょうと夫を床に休ませ、一時間余り最後のお別れをゆつくりすませ総代及び知人の元へ知らせました。

夫が逝りてこの十月二十八日が三回忌間近の今日、私のころのよりどころとし、私にそして檀徒に浄土宗の尊きみ教えを身を以て示された信仰厚き僧として大往生されしわが夫を賛えます。そして尊き聖としてのわが夫を永にお慕ひ致します。過日静岡県寺庭婦人講習会に出席しその御縁により「浄土」に発表させて戴くことの出来まことをこころより感謝申し上げます。(三十三・八・二五)

会員各位にお願い

- 1 会員五名以上で支部をご結成下さい。
- 2 支部には、支部拡張用としてお申し込み次第無料で見本「浄土」をお送りします。

3 二十名以上の支部には、毎月浄土を一冊贈呈します。

砂上の足跡

村瀬 秀雄

久・かとうきんいち

久子、お前は娘時代をどんなに暮してきたかは別として、私と結婚してからはほんとに苦惱との闘いに一生を終ってしまった。負いきれない重荷にあえぎながら私と一緒に歩いてくれた。私がいつもお前に対し、口にとそ出さなかったが、感謝していたことを信じてもらいたい。今更お前に詫びても許してもらえないだろうか。

久子、お前が私のもとに嫁いだ時は、父の残した借財で私は四苦八苦していた。表向きは一応の商人として立派に見えたかも知れないが、内実は火の車であった。こんなことはお前にすぐ判った筈である。知っての通り私は身体を粉にして働いた。爪に火をともしような暮し方を続けてきた。お前には何一つ買ってやったわけでなし、優しい言葉一つかけずでもなかった。それでも愚痴一つもらすことなく、一緒になってよく努力してくれた。健康に恵まれなかったお前が、時には無理だな、と私が心配する程にまで働いてくれた。それに私の感心したのは、近所からの嫌われもので、頑固一点ばりの母親との折合いであった。母親に対してもよく勤めてくれた。

我ままな母親は、私の目からみても老人らしくない老人であつたけれど、それだけ近所の同情がお前に集つていたようである。

良助が生れて、これが人並に育つてゆくにつれ、お前にもはつきりした目標と張り合いがついたようであつた。もちろん私とても同じこと、一日の楽しみは良助の生長にあつたし、どんな苦勞も良助の寝顔を見ると一度にけしとんで、明日への新しい希望がわいた。

自分の老い込むのは判らなくとも、良助の一日の成長は目に見えるようであつた。やがて高校を卒えた良助が、私の片腕として家業を手伝ってくれてから、商売はグングン伸びて行つた。若い者を二人も備つて、なお注文に間に合わないことがあつた。嬉しい悲鳴とはこんなことかと、私たちは休みなく働いたけれど、今思えばこの時分だけが私たちの最良の時であつたわけである。

良助がオート三輪車を欲しがつた時にも、私は口でこそ近所の真似をするのと叱つたものの、無理をしてまで買つてやつたのも、私には嬉しいことだつた。お前は若し事故があると大変だからと、それだけ熱心に反対したけ

れど、私は良助がお前に似て内気なところがあるので、大丈夫心配はないとお前の反対も気にならず、良助の腕前を信じていた。三輪車のおかげで、商売も二倍、三倍と能率があがった。それに近所からは「良ちゃんの運転ぶりなら大丈夫ですよ。何しろ牛車以外には追越さないから……」と、「冗談にいわれるので、私はたでもう安心したり、喜んだりしたのであった。それでもお前はいつも「気をつけなさいよ。向うからぶつけられることもあるから……」と注意をしていた。

だから、良助が三輪車の下敷になったと聞いた時には、何んのことかと疑った。やがて良助が死んだと告げてくれる人があっても、信じられないことであつた。

いつものように、良助が小田原に届ける荷物を三輪車に満載し、私どもに片手を挙げながら、軽やかなエンヂンの音を残して行つてから十分位しかたっていなかった。良助が酒田橋のカーブにかかると、後から大型トラックが追ってきた。良助はクラクションを聞くと、車を左方によせて、トラックに道をゆずった。トラックの運転手は、前方の三輪車

が素直によけてくれたので安心したのか、速度をゆるめようとせず、三輪車のすぐ後でハンドルをきった。ところがトラックの後方が三輪車の後方にぶつかってしまった。三輪車はわけなく転覆してしまった。良助が附近の病院にかつぎ込まれた時には、すでにこ

のに感心せずにいられた。私は当のトラック運転手とは遂に一度も逢わなかった。ほんとには逢い得なかったのだ。当の運転手が訪ねてきたと聞いただけで、私は両手を血で染めた虐殺者が、おく面もなく乗り込んできたとしか思えなかった。私にとっては息子の仇敵に外ならなかった。

近所の人が、この事実を私にいち早く教えてくれた。私はその話を聞き終らぬうちにいきなり居間にかけ込んで押入れに頭をつつ込んだまま泣いた。私はどこにも持ってゆきようのない怒りに燃えた。私は直ちに病院に馳

私から見れば、トラック関係の者は誰もかれも仇敵の片割と思えた。こんな人々が来たと様子がわかると、すぐ私は倉庫の奥にかくれてしまった。

をいうべきであつた。しかし残念ながら私の心には、当然のことをする余裕すら失っていた。私は鉄棒で思いきり脳天を撲られて昏倒してしまつたようであつた。

運転手は息子を故意に虐殺した犯人である。その関係者は同情の余地のない加害者である。私のこうした言葉が、いつ片方の耳に入つたのか、先方では私に対して憤慨していたそうで、そのため更にお前に苦勞を重ねさせてしまった。

この点、お前の方が偉かった。さつき家を発つときは変りてはた良助の遺骸を守つて、お前は家に帰ってきた。講仲間のお手伝いはあつたにしろ、お前ひとり、葬式万端から忌中の行事まで、よくやってくれた。特にトラック側の人たちとの交渉までしてくれた

普段から近所と世間付合をしていない私に對して、それだけ信用も同情もなかった。近所の人たちが噂している私の悪口雑言が耳に入ってきた。例えば「息子が重傷を受けた通知を聞きながら、平気で仕事を続けていた。よく仕事ができても

のさ、人情なしとは恐ろしい」

「一人息子は即死だったから、いくら願いでも仕方ないに違いないけど、息子より金儲けの方が大切だとは、呆れはてた守銭奴さ」

私の蒔いた種ではあるが、こんなことを聞かされる氣持を察してもらいたい。踏んだりけったりとはこのことであつた。私にすら耐え難いことで、お前の受けた打撃の程も判るといふものであつた。

良助の百力日の夜であつた。お客が帰って片付けものも終つて、急にガランとした部屋に白位碑だけがひとりぼっちで飾られてあつた。いつ飛び込んできたものか、一匹の蛾が位碑の前の供物にとまつていた。若い者たちが氣がついて、これを追い払おうとした。その時、お前は若い者を制して、障子を急ぎ閉めてしまった。お前は位碑の前に一匹の蛾のいることを、誰よりも外きに知っていたのに違いない。お前にとってはこの蛾が良助に見えたのであろう。私はこれをもっともだ思ふ。一匹の蛾が法要を喜んで羽根を休めていた。これは良助の身替りであつた。私だつてそお思ひたい。しかし悲しいことに、この時

分からお前の頭が普通でなくなつていたとは、後で氣のついたことであつた。

それからというものは、お前は暇さえあれば国道に立つて、疾駆する数々の車を眺めていた。雨の日もあつた。風の日もあつた。時には私も、お前と一緒に国道に立つていたこともあつた。古鉄屋に売ってしまった車が、走ってくるわけがない。と知つていて、車と車の間にフト目を凝らすことがあつた。

またお前は、睡れぬ夜が多かつたようだ。

お前が、夜半になつてふいに起き出し、入口まで行つてみるものがあつた。実は私も同じことだつた。夜更けてくると、さすが車の往來が減つて一とき急に静かになることがある。ブレーキを踏んで家の前に停る三輪車の歩く足音が裏口の木戸でとまるのを聞いたことがある。倉庫の中で樽を置き替えるような音を聞いたことがある。そんなとき、私は頭をあげて耳をすませてみるが、音の消えた後は一層の静寂があるばかりであつた。するとお前がムクムク起きあがつて入口に出かけて行つた。やっぱりお前にも聞えたのかと思ひ

私は床の中で独り泣いた。お前が力なくまた床に入る頃には、私は声を出さないように力一杯食締つて耐えていたのであつた。

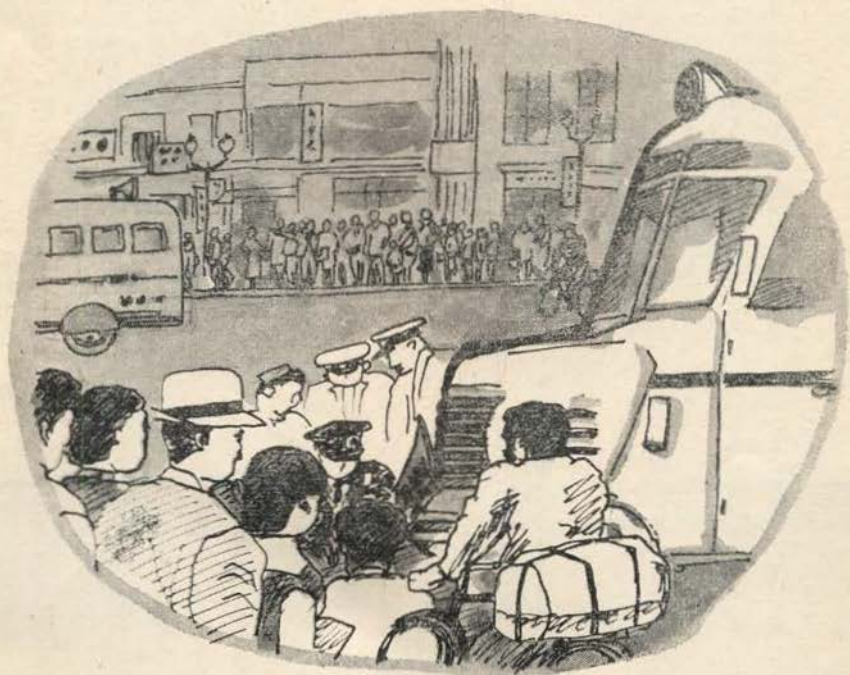
ある日、私は若い者からこんな話を聞いた。やはり夜中にお前が氣がつくと、奥の障子が赤く明るく見えた。そこでお前が障子をあけて裏に出てみると、倉庫の扉が空いていた。お前にしてみれば、良助が倉庫の不用心を教えてくれたことになる。若い者が言葉を ついで、「おばさんは瘡せられましたね」と、私に注意してくれた。

これで氣がついたのだが、その頃すでにお前の不睡眠はかなり高度になつていたらしい。夜が更けるにつれて、家の前で停る三輪車の音を待つていて、一睡もしないことがあつたらしい。だから不睡眠でも、お前にとつてはそれ程の苦痛と感じなかったかも知れないが、身体には大きな影響があつた筈である。

私がお前の病状の篤いのを知つたのは、お前が夜半に鉄道の踏切に立つていたのを発見したことからであつた。私は胸騒ぎがして目が覚めた。お前がいけない。入口の戸が空いて

いる。国道を見渡してもお前の姿が見つからない。まさかと思ったが、国道裏の鉄道線路に上ってみたら、踏切の辺りにお前のシルエットが見えた。そして一緒に家に帰る途中で、私はお前の態度、歩き方から、これは普通ではないぞと感じ、しまったと胸をかんだことであつた。

後悔先に立たずであるが、あの時すぐにお前を入院させればまだよかったのである。おかしい話だが母親に対する遠慮から、私にそれができなかった。母は私と違つて身体も丈夫、意志も頑強だ。孫が死んでも、食べるものはよく食べるし、夜もよく睡つた。健康そうな寢息を聞きながら、いくら親でも憎々しく感じたことが再三であつた。久子が呆然としてしまふし、私が深酒を続けるし、事実母が商売のきりもりをしてくれたからどうやら破たんをかくし得たので、母ばかり責められない。元来母は人使いの荒い方で、近頃は一層それが激しいと若い者が愚痴る位であつた。私たちといえど母には一目置いていたのであつた。私は自分の引目から、お前に対する処置を怠り、とんでもないことになつて



しまった。

私はその夜に限って、宵の内から睡りてしまったらしい。私がお前のいなくなったことを知ったのは、午前二時頃だった。前の例もあるで、国道をみた。鉄道線路をみた。今度はそのどちらにもいなかった。次に私は浜に出た。浜は月で明るかった。だから一目で判るのだが、お前の姿は見えなかった。砂浜の明るい時は、かえって木の茂みが真闇に見える。私は一つ一つの草むらの中に入ってまで、順次探して歩いた。それでもお前はいなかった。東の水平線に赤みがさしてきたのは、間もなく夜の明けるしらせである。私は疲れた足を引かず家の方に向って歩いた。そして浜から上ろうとした時、私はお前の足跡を砂上に見出したのであった。

私は棒立ちになってしまった。なめらかな砂地の上に、たしかに家の方から一直線に、お前の足跡が海に入って消えていた。私はお前の足跡の上を一步と踏みしめながら進んで行った。そして最後の足跡の上に立っていたとき、波がきて、私の立っている足跡までも消してしまった。

漁師の人たちは沢山の舟に分乗して熱心にお前を探してくれた。しかしここから海に入って、遺体の上った例がない通り漁師たちの努力は無駄に終わった。

久子、お前は遂にこの大自然の中に姿を消してしまった。私は今墓の前に立っている。

お前の身体が葬られていない空家のような墓の前に立っている。しかしここから見れば、本堂の屋根を越して、広い相模湾が一望の内に見渡せる。秋の陽が燦々とふり注いで、海が眩しく輝いている。クッキリ浮んだ大島の頂上に、一すじの白雲が棚引いている。余りにも自然が大きくて、目の下の国道の車も、線路の列車も、玩具にしか見えない。点々とある屋根の下で繰り返される俗事のいろいろが、いかにも愚かしく思われてくる。大きな海を高い所から眺めると、ますます大きく見える。しかもこの海に、お前がとけ込んでいる。

久子、私はこれから力強く生き続けてゆくつもりだ。今までの七日七日目に、ここにきて墓の前から海を眺めた。その度毎に私の中に自信が育った。そして今日は、お前の中陰

あけた。

さっき本堂の御仏前で、お念仏を唱えてきたが、今こうして眼界一面に拡がった海を眺めていると、アミダさまのお力が宇宙一杯に充ち満ちていることが実感される。

久子、お前の身体はこの海中に広く深く拡がって行ってもらいたい。手も足も大きく伸ばしてアミダさまのお力を受けとってもらいたい。

森と湖のまつり

武田泰淳著

滅びゆくアイヌ民族と日本人の葛藤、
阿寒湖のほとりを背景に、血と肉の相剋
を描く野心的長篇。

新潮社 発行

価 三七〇円

国際宗教学会議



一行を終えた参拝院恩知

第九回国際宗教学宗教史会議が、去る八月廿八日から九月九日まで、十三日間にわたって外国人学者百五十余名、日本人学者四百五十名が参加して盛大にひらかれた。この会議は、宗教

を開かれ、わが国でも、人文科学部門における学術的な国際会議としては最初のものであっただけに、そこに寄せられた期待は非常に大きかった。その期待に対し、今回の会議は充分にこたえ得た意義をもち成果をあげたといえよう。

学宗教史をはじめ、広く宗教現象を学術的に研究する学者の集り、およそ半世紀にわたる歴史を有している。その第一回は一九〇〇年にパリにおいて開かれ、その後、一九〇四年バーゼル、一九〇八年オックスフォード、一九一二年ライデン、一九二七年ロンドン、一九三五年ブラッセルとつづき、戦後は、第七回会議が一九五〇年にアムステルダムにおいて、第八回会議が一九五五年にローマで開かれ、本年日本で開催された会議は第九回となったのである。しかも初めてヨーロッパ以外の地、東

まず、八月廿八日から三十日まで、東京産経ホールにおいて、主題「過去および現在における東洋の宗教」のもとに合同会議と四つの部会、一、未開宗教、二、古代の宗教、三、現在の宗教、四、宗教学一般に分かれ夫々研究発表がおこなわれた。卅一日から九月四日までは、関東地域―東京都内、日光、鎌倉等の神社仏閣および宗教施設を調査見学、引続いてシンポジウム、「東西の宗教―過去百年における文化交流」というテーマのもとに、それぞれ研究発表、討議がなされた。更に四日以降は、関西地域―伊勢、天理、奈良、京都と調査見学をおこない、その間、デイスカッションをくりかえしながら、九日京都大学において、深い意義ある国際会議の幕を閉じたのである。

洋において、とくに日本におい

この会議を通して、一、人間生活に大きな

機能と役割を果たしてきた宗教の正しい理解。

二、あやまった宗教に対する正しい宗教批判。三、宗教現象を通して逆に民族および人間の理解。これらの三つの点を学びとることができた。さらにこの会議に出席された、会長のベタツォニー（ローマ大、イタリア）をはじめ、ブレイカー（アムステルダム大、オランダ）ハーツホーン（エモリイ大、アメリカ）デュボン・ソソマー（フランス）メンシング（ボン大、ドイツ）キャムベル、（アメリカ）さらに、「祈禱」あるいは、「仏教の禪定」という名著があり、世界的令名のあるフリードリッヒ・ハイラー（マールブルヒ大、ドイツ）等の世界的学者における共通のものは批判的な精神態度をもっていることと、宗教の融和結合へのねがいと情熱をひしひしと感じられたことである。かれらは、学問に対する批判的かつ客観的態度をもちつづけながら、その基調には、排他的な感情は少しもみえず、むしろ、寛容と深い愛情をもって、夫々の宗教を学び、さらに、異なる東洋の宗教が統合されることを心からねがっているようであった。言語や風土を異にし、民族

の別はあるうとも、永遠の真理を求め、人類の平和共存をねがう感情においては別はなく、東西の宗教文化交流、世界融合への一石を投ずる役目を、かれらは果たしたともいえる。そのことをハイラーは次のごとく語っている。

「愛こそは、神に至る最上の道である。いかにその目標が異った言葉で表現されようとも、その意味するところは一つである。菩薩の悲願が万物の救いにあるごとく、この理想



て 良 奈

は、地獄や永遠の罰など通俗的な見解を却けるのである。全宗教の統合の理想を実現するには、あらゆる教義、礼拝儀式の差に関らず存在しているのであって、われわれが人為的にこしらえるのではなくて、直珠を採取するように、現に存在する事実を拾い上げさえすればよいのである。（中略）真の伝道は、プロバガンダや、改宗を旨とし、他宗教を誹謗するものであってはならない。それは兄弟同士の友好的な交換であり競走であって、この意味の伝道が引続き西欧から東洋になされるのみでなく、ライプニッツの述べたように逆に東洋から西欧になされることが望ましいのである。宗教が、このように他を理解し協力することを学びさえすれば、政治にも勝って、人類共同体と、世界の平和のために貢献することができよう。」

そして、かれは最後に、ウバニシャッドの一章を結びの言葉としていえる。

ともに来り、ともに語り、いざや思いをともしせん。なんじが力を一にし、なんじが心を一にし、なんじが魂を一にせば、なんじは不動のものとならん。平和、平和、平和。

靈界の不思議



佐藤諦叡

靈の有無等について大学者達までも大論争をしたが、さらにまともならず、ものわかれとなったことが時々雑誌等に掲げられているが、両方の意見ともに正しい。然し唯一方的に偏し、自分の考えの反対の事柄を考えて見ない人が多い。同じ室に多くの人々が列んで寝ていても夢を見る人もあれば、見ない人もある。夢を見ても別々のものである。そのことと同じように靈なるものは其の人の心によつて作られたり、作られなかったりするものだ。それから少しも関係の無い靈が出て来ることなどがあって、靈界は実に不思議なもの

で、現代の科学や哲学では説明出来ないものがある。現存する人の靈は生靈というし（生靈も相当な活躍をすることがある）世を去った人の靈を死靈という。現世を去った時に大根でもくさつたと同じように靈も肉体といっしょに消え失せると思つてゐる人でも死ねば其の靈は良心の示す方向にむかうのであつて、そう考へてゐる人の中、良心にせめられてゐる人の靈はおそろしい処に往くだらうし良心にせめられてゐない人の靈は肉体と共に消え失せてしまふ。靈があると思ふ人が世を去ればその靈は生前常に思つていた處、良心の示す方向にむかつて往くのであつて、良心に對し恥ずかしくないと思ふ人の靈は、生前

願つていた處に往く事が出来る。（動物の靈の有無については人のと同じである）死後誰も供養して下されないと（無縁仏という）その靈は永く自分の骨より離れないで苦しみ、そしてその近所に住する人、又は其處を通つた人に供養して下されとの意味で縛りつく、即ち靈に崇められたという（神様も崇ることがあるという）から礼を失しないように注意しなければならぬ）然し氣の弱い人は「実に氣味が悪い、何かに崇められてゐるではないか」などと思つて靈が縛りつくのに都合良くすることもある。

靈の崇りはなくとも自分自らが靈に崇められたようになることもある。すがる靈の力が強ければ強い程、すがられる人の精神力が弱ければ弱い程、縛られる人がひどい目にあふ。然し精神力が強ければ縛られても何とも感じない。それで目に見えない靈は有ると思へばあるし、無いと思へばないやうなものだ（如何に人知が進んでも靈を写真に撮る事は出来ないと思ふ）

これから述べる事は實際の出来事であるので御参考提供する。

(イ)

①山形県北村山郡の或る村で（人名は申しません）約四十五、六年程前の話、其の家では仏の供養はあまりしないで、時々水をあげる位であったという、おじいさんは相當な変り者で、仏供養の事を話すると鼻で返事をして相手にならない、お婆さんは占いが好きで一年に數回古い者の家に行く、そうするとおじいさんは「また出かけたな」といつて笑っていたとの事、ところが御盆に近い或る時、お婆さんは握り飯を持って古い者のいる町へと足を運んだ、それを見た例のおじいさんは、何を思ったか、仏壇に行つて位牌を全部出し、それをいっしょにして紐で結つて座敷の柱にさげておいた、お婆あさんは古い者の家に行つて仏様の事を頼み「今日は何といわれるだろうか」と手に汗を握つて待っていたが、占いはなかなか、何ともいわない、暫くしてから「ようやく仏様が出たが仏様のいうには今日は体が縛られているから苦しくて何ともいうことは出来ないといつてすぐ引込んでしまった」といつた、それでお婆あ

さんは不思議に思つて家に帰り、その事を家人に話すと、悪戯おじいさんは真面目な顔で「そうかな、占いもあたることがあるな」といつたので、お婆あさんは尚不思議に思つて「何かあつたのか」と質問したら、おじいさんは「彼処を見る」といつたので、あ婆あさんは其処を見ると大変な事になつていた。おじいさんはその後お婆あさんのことを悪口しないし、眞の仏供養者になつたのである。

(ロ)

②山形県村山市区域に「せいかいだ」という土地があるが、事件のあるまでは「せいかいだ」という謂を誰も知らなかった。その土地には田があり、田の前に松林があつたが今は畑地になつてゐる。これから述べることは十數年前の出来事（家名は申しません）或る家で松を切つたあとの草生地を開墾し畑にして肥しをかけて種子を撒いた。ところがそれからすこしの日数がすぎると大きな牛が俄に死んだ。その後またわずかな日数がすぎると主人が死んだので不思議に思つて占つてもらつたら「豪い人の霊が眠っている上に肥しを

かけたのでその靈に祟られている」といわれたのでその豪い人とは誰か、眠っている場所は何処だろうか、歴史家にきいて見たら、歴史家は「大阪の陣において千軍万馬の間に力戦苦闘したがその甲がなかつたために（道中は戸沢公といつしよであつたという）敵地の間を苦心に苦心をかさねて、この地に來た三好青海入道は、このへんに居を構えたらしい、それで今は墓石こそないが多分このへんに埋葬されたらしい」といわれたので、早速其処を掘つたら薬灰が出た、尚掘つたら人骨が出たので、すぐ供養をして靈を慰めたらその後祟りは無かつた、それより「せいかいだ」という謂もわかつた、後日青海入道の石碑も建てた。

実に靈界は不思議なものであるが何といつても阿弥陀様におすがりして、結構なお浄土に往くことが何よりの肝要ではあるまいか。右の事柄に関し御研究の深い皆様方の御判批と御指導を心から御願ひ申し上げます。

×

×

×

ノッポの悲哀

い。

他人は簡単に「ノッポだ」ですむだろうけれど、私にとっては仲々複雑である。私は急いで玄関から一間位とび離れて、頭を下げたままで待っている。顔だけ軒下にかくれている訪問客では、家の人も驚くし警戒されて不利である。一間以上離れて立つのも遠視法の利用であり、頭をさげているのも、相手に平等感を持たせるためである。客間に通されてからも苦勞がある。出してくれる布団では、膝をのせれば足首が後ろに出てしまい、あぐらをくめば両膝がピンと出てしまう。

私のことをよく鈍重だと、ひとがいう。子供が元気に人混みだろうが何んだらうが、敏捷に駆け廻っているのを見ると、私だつてよ

お寺にお詣りに行って、お線香をあげ、本尊さまを拝んだとき、アミダさまの左足が半足長だけ前にでているのに気がついた。このアミダさまは、お歩きになっている。いわば行動中のアミダさまだとは、何回もお詣りしながら気がつかなかった。

お茶が出てから、和尚さんに「ご本尊は動いている。お働き中なんですか」と質問すると、同行の叔父が「何しろノッポですからね」と横から口を出した。これで万事休す。私はもう質問する勇気がなくなった。私にとって「ノッポ」といわれる位嫌いなことはな

婦宅すると部屋から出ない。台所や便所一つ行くのにも、いくつかの鴨居を潜らなくてはならないのが面倒である。昔から鴨居の高さは五尺七寸だから昔はノッポがいなかったらしい。

仕事の都合で、殆んど毎日横須賀線か湘電車に乗る。車に入ると一瞬の間に子供か女の人、必ず子供か女の人、の前に座を占める。

だいたい電車の構造は子供か女の人を標準にできているらしく、男なら十人が十人とも窮屈である。役人の不親切がこんな所にも現れ

ているわけだろうが、私には男同士では絶対に腰掛けられない。近頃はサービスのつもりで車内に扇風機が廻っている。これがまた厄介で、うっかり通路をゆくと、頭の毛が扇風機にまき込まれそうな恐れを感じる。実際はそんなことはないのであるが、恐怖を感じることは事実である。

先方の家に行って案内を乞うにもコツがある。家の人が玄関に出てくる気配がすると、私は急いで玄関から一間位とび離れて、頭を下げたままで待っている。顔だけ軒下にかくれている訪問客では、家の人も驚くし警戒されて不利である。一間以上離れて立つのも遠視法の利用であり、頭をさげているのも、相手に平等感を持たせるためである。客間に通されてからも苦勞がある。出してくれる布団では、膝をのせれば足首が後ろに出てしまい、あぐらをくめば両膝がピンと出てしまう。

ガイドブック「浄土宗」を読みて

藤井実応

本誌にも度々執筆せられている須藤隆仙師が今度、法然上人七百五十年御忌の記念出版として『ガイドブック、浄土宗』を著された。「浄土宗はどういう教えであるか」ということを誰にも分り易く、みんなに領解できるように、手頃な冊子（B版二四頁）として発行されたことをよろこびます。問答風にして「浄土宗はどんな宗教ですか」「浄土宗の御本尊さまは」「阿弥陀如来とはどんなお方ですか」等の問を三十六余項目に分けて浄土宗の教えを一通り体系的に説かれています。仏教を分り易く現代人に納得できるように特に苦心努力せられて、ことがよく推察されます。例えば、表紙の裏に一枚起請文が掲げられ、その意訳がのっています。更によく意訳されてあると思います。又「浄土の世界観は」とか「浄土宗の人間観は」として末法濁世のことや、罪惡生死の凡夫のことが説かれていいます。世には余りに伝統にとらわれて現代人に会得ができなかったり、或は

伝統を無視して独断的な解釈をするものもありますが、この書はそういうことでなく、伝統を尊重しつつ、現代人に理解を得るという私共の願うところを表わされたことはうれしいことであります。師は御承知のように北海道に教会をもちつつ、念仏の実践と共に伝道に従事せられていますが、又教学研究会をつくり、宗学の研究に精進し、その研究誌『解信』を隔月に発行せられる新進の学者として常に敬服している方です。今、師の苦心研究によって分り易い「浄土宗」のガイドブックのできたことをよるこび、一般の方々に推奨いたします。小冊子のことですから、これによって浄土宗の教義を詳しく知ることはできませんが、詳しく知りたい人の参考書も記載されています。これを信徒の集いに、或は法話の席などにテキストに用いるならば、最も有効な入信、伝道の方法となりましょう。（頒価実費三〇円、送料八円、北海道森町、森称名寺内浄土宗教学研究会発行。）

くみとれてしまう。かりに私があの真似をしたらどうなるか。鈍重にならざるを得ないゆえんである。タクシーを呼び停めるにも、あらかじめ手を挙げていないと停ってくれない自動車私が私の近くにきてから手を挙げたのでは、運転手に見えないらしい。

そんな事より、私は重大な損失をしている。物一つ持つにも、仕事の方則によって他よりは余分な仕事としているわけで、小柄な人が重い荷物を軽々と取扱うのを見ると、全くうらめしくなる。

だが、ノッポにもよい点がある。列挙すれば欄掃除に時計のぜんまい巻き、古着屋の前を通って呼びとめられない、映画館で混んでいるともよくみえる、友達との待ち合せに目立つといった喜ばれる、この位のところであるか。いや重大な点は、アミグ様の足が歩いている形だと発見したことである。

それなら身長何センチあるかって、これ以上恥をかかせないで下さい。

法然上人をめぐる人々 (三)

— 関白九条兼実と熊谷直実 —

井 川 定 慶



お越しを乞う」というお招きが頻々にあるという。これは上人としては案外なことであつたらう。

一、想わざる訪問者
「われ浄土宗を立つる心は凡夫の輓土に生れしめんが為めなり」と宣言せられた法然上人としては、念仏弘通の相手は平々凡々たる大衆であつたのであるが、比叡の山から下りて京洛の吉水禪房（今の知恩院のあたり）で浄土門を開いて説法しかけてみると、一般大衆に交って高貴な方が牛車を駐めて聴聞せられたり、特便を立て、「是非

時の権勢であつた関白の九条兼実公はその中でも特別な信仰者と思われる。兼実公の日記で今に遺されている「玉葉」を繙いてみると驚くほど度々に亘って上人を招き、或は授戒の作法をうけ、或は念仏の聴聞、或時は中宮の為めの授戒、自らの出家得度の大導師を法然上人にという有様、別けて授戒をうけられていることが六、七回にも及んでいる。

今から考えると、授戒の作法というものは生涯に一度で充分であらうと。然し関白は度々重複している。そして最後に出家得度をして法名を円証と改めている。

二、大乗円頓菩薩戒の相承

「授戒」は単なる戒法を授かるのではなかつたらしい。殊に関白兼実公として見ると、心の妄念を打ち払う為めとか、祥福を招くという意図であつたかと想われる。平安期の名残りがまださめやらぬ鎌倉初期の公卿として、大徳を特招しての秘儀は、現世にも御利益を蒙ると考えていたからであらうか。そこには一面の理由がある。それは上人のうけ継いでいられる大乗円頓菩薩戒の相承というものは比叡山で慈覚大師以来伝々唯一人として重ぜられている秘儀で、今や法然上人は比叡山を下って浄土宗を別立していられたとしても、大乗戒は法然上人より他に授与する人が、比叡山には無かつた上人は唯一の特権保持者であつたのである。

三、方便として戒儀

上人は念仏弘通の一の方便として此の大乗円頓戒相承を利用して授戒を望む人々に近づき「お授戒はありがたい。然し末世の人夫には授戒法を厳守するというのはむづかしい。ところが幸にお念仏は如何なる者——それは賢愚を問はず、たとえ破戒のものまでも阿弥陀如来の救済に預かりますよ」と説法してだんだん念仏の法門にひき入れられたのではあるまいか。

関白兼実の蒙った教化ケースがそうであったかと思われる。そして上人は中宮に、やがて参内して主上に授戒という事にもなっている。「玉葉」を見ていると分るように関白から招かれている当初はただ授戒であって、それが法門談義となり、念仏に進み遂に選択本願念仏集を強いて願って撰述せしめるまでに関白の心境を進めていられる。これが法然上人の上層階級への伝道方法の一端を露^{あらわ}しているかと想察せられる所以である。

高倉天皇へのお授戒は承安五年の春であ

るから浄土開宗直後である。或る学者は上人の比叡山を下る動機はこの授戒の爲めであつたのではないかとまで極言している。ここにも念仏宣布の方便としての上人の授戒を考へられるのである。

四、無差別の教化

法然上人の眼前には源平とか賢愚、男女、上下という差別が無かつた。

上人は平重盛に近づき重衡に剃髮の儀式を作法し、師盛の子を養つて源智（知恩院二代）として育てていられるし、（平家）、鎌倉の幕府が開けてから頼朝の援助する東大寺大仏殿再建に干与せられその夫人政子とは信仰上のことで再三文通をとり交わされている。上人には平家とか源氏とかのわけ隔てがなかつた。

また源氏の荒武者で雷名をとどろかせた熊谷次郎直実が比の世に望みを絶ち仏道に入つて修業せんと京都に上り来て、法然上人を訪ね、所懐を陳べ許されて上人の弟子となる。

或る時上人が関白兼実公の九条邸に招か

れられるや、思いやりの深い上人は今道心の熊谷直実改め「蓮生」を促されて「もと公卿の邸へも出かけては如何ぢや」と同伴につれて行かれた。さて、上人は奥に通られて関白と差向いで法談せられているが、杳^{やう}ぬぎ石の脇で待つ蓮生には上人の声が壁越しであつた充分聴聞が出来ないので、「穢土ほど浅間しい処はない。極楽浄土にはかかるへだてがあるまいに」と叫ぶのであつた。

想いがけない大声に驚かれている関白に「あれは礼儀も知らぬ不つかものです。御許し下さい」それに対して「法門を聴きたいらしいから、ここへ上らせてあげましょう」と関白もなかなかやさしく同情が深い。

そして当時としては全く破格の扱いをうけ、九条月輪の御殿に於て蓮生は兼実公と同居して上人の法門を聴くことを得たのである。阿弥陀仏のみ前には関白も今道心の青坊主も無差別平等であるということをし、九条兼実公ははや心得られるに至つていたからであらう。

五、逆さま馬

純朴な蓮生は上人の教えとほりに動作している。「仏さまを尊敬するものは仏さまに背を向けないものですぞ」と教えられるとそれをそのまま実行して馬で関東下りをする時には鞍もさかさに、自分はさかさに馬に乗り、伴いのものに口をひかせて

浄土にも剛のものとや沙汰すらん

西に向いてうしろ見せねば

と往時弓矢をとった時のことども想い合せて詠じ乍らも、心には西方のお浄土を忘れず阿彌陀仏を尊敬していることを地で行った。まことや一幅の絵図とも見られ得ようか。

熊谷蓮生本人としては真剣な心がまえ、然し見る人にはユーモラスに見えた旅姿である。
(知恩院教学部長)

× × × × × × × ×

仏教ものしり帖

木魚

お寺の本堂に、厚い布団の上に置かれている木魚。お経の時、ボクボク叩かれる木魚。あのいうにいわれぬ奥床しい音を出す木魚とは何か。これは結局は、お経またはお念仏の拍子をとるために使われる、木をくりぬいて作った楽器であるが、どうして魚の形をしているのか。

昔、インドの釈尊の弟子の一人で、非常

に眠たがりやで居睡りの名人がいた。本人は一生懸命に仏様のお話をきいてえらい坊さんになろうと努力するのだが、天性の愚かさのためについ居睡りをしてしまう。これではならぬと、どんなに努力しても駄目、本人もとうとうあきらめて、いよいよ年をとって死ぬという時になって、仲間の坊さんにこういった。

「私も生きている間は居睡りばかりして、

折角のありがたい仏様のお話もろくに聞かずにすごしてしまった。しかし、死んだら魚に生れかわる積りだ。魚は夜でも目を明いて眠らないそうだから、来世には魚になって眠らずに仏道にはげむつもりだ。そこで一つたのみがある。私が死んで魚になったら、その姿を木に彫って下さい。そして折にふれて叩いて下さい。そうすれば決して眠ることもないでしょうし、また叩かれて出す音で、私みたいな愚か者もきつと目をさまして、仏道に専念することでしょう」

そういつて亡ったとのことであり、このいわれから、木魚は魚が丸くなっている姿をしているのである。

はたくには、軽く叩くことが大切で、また浄土宗では語と語の間に叩く。お念仏の場合でも、

ナム・アミ・ダブ・と黒丸のところで叩くようにするならわしがある。

会員だより

浄土御送り下さいまして
 ありが度う御座いました。
 ラジオ人生読本の講座で、
 増谷先生の法然上人の真隨
 の御言葉を拝聴し有が多く
 て、福岡県田主丸町法林寺
 吉末真龍師へ、外国語大学
 の先生がこんな尊い御話を
 して下さいから浄土宗の
 あなた様へ御礼申上げると
 ハガキ出しましたら、増谷
 先生の御人格、浄土の雜誌
 御教えいただきました。友
 松、竹中、一瀬先生の御講
 話もいつもありが度く拝聴
 致して居ります。佐賀県塩
 田町本応寺熊谷上人より四
 月五月六月号は拝借してよ
 みました。

佐賀県 西岡 千代

新規会員

県名	氏名
長崎	立芳 願寺
"	原松 次
兵庫	念仏 寺
長崎	前田 佐七郎
神奈川	善徳 寺
京都	奥田 光信
山口	野村 義彦
"	福田 与七
長崎	東七 太郎
千葉	守永 寺
"	淡濟 寺
長崎	松本 良次
香川	広瀬 孝臣
広島	国重 円照
北海道	真行 寺
東京	多田 廉
愛媛	井上 基行
福岡	合屋 賢定

支部通信

茨城	専修寺(二十名)
代表者	村上 博了様
埼玉	円心寺(二十名)
茨城	常林寺(二十名)
大阪	大光寺(二十名)
代表者	三枝樹正道様
広島	浄国寺(二十五名)
東京	伝通院(三十五名)
"	大河内隆弘様
"	西福寺(二十五名)
"	成田 良穂様
福井	善導寺(三十名)
"	大門 俊我様
東京	講安寺(二十五名)
"	池田 立基様
青森	青岩寺(七名)
東京	浄心寺(十名)
京都	都家政学園(十二名)

「浄土」購読規定

一部 定価 金四十円
(送料 四円)
会費一力年 金四八〇円
(送料不要)

浄土 十一月号

昭和十年五月廿日
 第三種郵便物認可
 昭和三十三年十月廿五日 印刷
 昭和三十三年十一月一日 発行

定価 四十円

編集人	竹中 信常
発行人	佐藤 密雄
印刷人	神谷 秀雄
印刷所	神谷印刷株式会社
発行所	法然上人讃仰会

東京都豊川区上大崎一ノ七八二
 振替東京八二二八七番

東海高等學校長 林 靈法 新著

危機と信仰

新しき日のために

B六判二八〇頁
価 二五〇円
送料 三〇円

目次

第一部

水火中間の白道
常倫を超える
わが本国は浄土なり
童心に生きる
親の死を喜びうる人
山の動く日きたる
法界に供養するもの
真理の王国なる
女性興法

第二部

いかに生きてゆくか
信仰の大地性について
虚無と死を克服するもの
上宮王家の思想的悲劇
第三部
宗教は社会主義の敵か味方か
共產主義と仏教
日本仏教界代表の新中国訪問に寄す
人間教育の根底

著者はかつて国家主義とファシズムの弾圧に抗し、革新的な宗教運動の指導者として、世界平和と祖国の道を守り、昭和の思想運動史に一つの足跡を刻んだ宗教者である。祖国誕生の道は、宗教と教育以外になしと確信し、常に法然の深い浄土教に生きている著者が、ここに高い叡智と、深い愛情とをもって、人生と自己を語り、又社会と革命について語る。不安と絶望の現代に向って、孜孜として新しき日の炬火を説くところ、ひろく江湖に一読をすすめる。

発行所 百

華苑

京都市下京区堀川通花屋町
振替 京都 二五七八番

正しい信仰を得る為の

新興宗教の批判と分析

大正大学教授 竹中信常著

新興宗教

申込先

東京都港区芝公園十九号地の一
浄土宗教化団中央本部

新書版 八九頁
価 五十円
送料 八円

本宗檀家一軒一冊

須藤隆仙著 (トラクト版)
ガイド・ブック (二四頁)

浄土宗

申込先

法然上人七百五十年御忌記念出版
浄土宗教学研究会 発行
北海道森町 森称名寺
振替 函館 一〇一九番
価 三十円
送料 八円

本誌37頁に
内容紹介あり、
おおよみ
下さい。

五十部以上一部につき二十五円
五十部以下 三十円
送料 八円